

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1749	寛延2	7/24～	竹本座	双蝶々曲輪日記 続九場	第一 うかむせのおつづけにあいづのふへうり（土佐＝義助）、第二 すまふのはなあふきにぬけんのおやほね（錦＝両助）、第三 あげや町のいきづくに小ゆびのみがはり（千賀＝藤蔵）、第四 大ほうじ町のたて引にきやうだいのちなみ（上総＝弥七）、第五 しばうらのけんくはになんばのどろ／＼（信濃＝義助）、第六 はしものつじかごにあひごしのかけおち（大隅掾＝両助）、第七 道行なたねのみだれざき（大隅掾・長門・信濃・土佐＝藤蔵）、第八 やはたのおやざとにちすじの引まど（政＝藤蔵）、第九 くはんしんじのかくれがにこひぢのまぼろし（錦、長門＝弥七）。 ※角書「関取濡髪／名取放駒」。 ※語り「かちまけのしよぶづけはことばにかさなるあねのぬけんみにせまるつばぎはぬきさしならぬやはたのめくぎだけ／みうけにみうけのつづけかさねとだなのふうんとくにとかれぬあづまが思ひやまざきのなたね□□」。	山ざき与五郎（文吾）、ふじやあづま（伊平次）、ふじやみやこ（甚五郎）、なん与兵衛（門三郎）、山ざき与次兵へ（助三郎）、ぬれかみ長五郎（文三郎）、はなれごま長吉（才治）、おせき（小八）、むすめおてる（源助）、かごかき源兵へ（文三郎）、橋本治部右衛門（門三郎）、はゞ（助三郎）、まぼろし竹右衛門（門三郎）、むすめおとら（源助）。
1755	宝暦5	6/25～	京竹本座	双蝶々	相合駕籠（千賀、大和掾）。 ※「庭涼座舗操」の内。 ※太夫役割は文楽協会蔵の正本に拠る。	与五郎（貫蔵）、あづま（庫十良）、与次兵へ（勘十良）、おてる（十五良）、かごの甚兵衛（才治）、次部右衛門（源十良）。
1763	宝暦13	8/3～	竹本座	双蝶々	二つ目（かけ合 錦・染＝文蔵）。 ※「浄瑠璃相撲」の内。 ※人形役割は黒石陽子「早稲田大学演劇博物館所蔵黒木勘蔵旧蔵透写浄瑠璃番付について（一）（元文～宝暦）」（『演劇研究』第19号）に拠る。	与五郎（才蔵）、長五郎（冠蔵）、長吉（冠蔵）。
1764	明和1	12/1カ～10	京竹本座	双蝶々	相撲の段（君、崎）、米屋の段（崎、君）。 ※「冬桜咲分錦」の内。	与五郎（庄五郎）、あづま（甚六）、みやこ（半三郎）、与治兵へ（重五郎）、長五郎（貫十郎）、長吉（源十郎）、おせき（助三郎）。
△	1766	明和3	8以前	江戸肥前座	（双蝶々） 引窓（此）。 ※『義太夫執心録』に「此太夫 其後肥前座へ下り、師匠筑前の語られたる忠臣蔵九だんめ、双蝶々引窓、泉式部三ノ中・口、切が駒太夫にて」とあるに拠る。	
	1766	明和3	8	曾根崎新地豊竹此母座	双蝶々曲輪日記 道行（文・ツレ 八重、跡 かけ合 生駒・喜代・紀志）、八ツ目（口 喜代、奥 此）。 ※「扇子合名月座舗 続五組」の内。	あづま（三十郎）、おはや（三十郎）、なん与兵へ（伊三郎）、山さき与次兵へ（東工郎）、ぬれかみ長五郎（友五郎）、はゞ（東工郎）。
△	1770	明和7	12/13～	竹田新松座	双蝶々曲輪日記 続九場 第一 浮瀬の段（和、木々）、第二 相撲の段（三根、かけ合 染・咲）、第三 揚屋の段（弥、筆）、第四 大宝寺の段（染）、第五 難波裏の段（彦）、第六 橋本の段（春）、第七 道行菜種の乱咲（春・梶・弥・和）、第八 八幡の段（梶、綱）、第九 観心寺の段（咲、大切 桜）。 ※角書「関取の濡髪／名取の放駒」。 ※人形役割は黒石陽子「早稲田大学演劇博物館所蔵黒木勘蔵旧蔵透写浄瑠璃番付について（二）（明和）」（『演劇研究』第20号）、それ以外は『近世邦楽年表 義太夫節之部』、東京藝術大学附属図書館蔵「近世邦楽年表基本カード」に拠る。	山崎与五郎（才治）、藤屋あづま（小八）、女郎みやこ・女房はや（島八）、なん与兵衛・南方十次兵衛（藤五郎）、山崎与次兵衛（藤五郎）、濡髪長五郎（冠蔵）、放駒長吉（右蔵）、おせき（才治）、むすめおてる（小五郎）、かごの甚兵衛（冠蔵）、はしもと治部右衛門（真吾）、まぼろし竹右衛門（右蔵）、むすめおとく（小五郎）。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	1776～ 1777頃	安永5 ～ 安永6 頃	江戸 外記座	(双蝶々)	米屋(内匠)。 ※『評判鶯宿梅』内匠太夫の条に「安永五申年外記座へ下られてより、何一ツ取はずさぬ上手、中にも双蝶々の米屋の段大出来」とあるに拠る。		
△		安永中期	堀江 豊竹此吉座カ	(蝶々)	※『闇の磔』に「豊松重五郎。融大臣の時ば、蝶々の長五郎の母などはきつい出来で有たぞ」とあるに拠る。	長五郎の母(重五郎)。	
	1780	安永9	7	北新地西ノ芝居 竹田万治郎座	双蝶々曲輪日記	角力の段(沢・是)、米屋の段(染)。	与五郎(十七吉)、与次兵へ(久次郎)、長五郎(民蔵)、長吉(虎蔵)、おせき(文蔵)。
△	1783	天明3	4/6～	座摩社内 豊竹此吉座	双蝶々曲輪日記	三つ目(鶴、品)、四つ目(頼)、五つ目(かけ合品・村・初・為)、六つ目(房)、七つ目(道行・湊・品・其・桐)、八つ目(村、此)。 ※人形役割は黒石陽子「早稲田大学演劇博物館所蔵黒木勘蔵旧蔵透写浄瑠璃番付について(三)(安永～寛政)」(『演劇研究』第21号)、それ以外は『近世邦楽年表 義太夫節之部』、東京藝術大学附属図書館蔵「近世邦楽年表基本カード」に拠る。	与五郎(国八)、あづま(吉十郎)、みやこ(きく次)、なん与兵衛(国八)、山ざき与次兵衛(久次郎)、ぬれがみ長五郎(元五郎)、はなれごま長吉(乙五郎)、おせき(十五郎)、おてる(小八郎)、かごの甚兵衛(元五郎)、治部右衛門(乙五郎)、長五郎は、(十五郎)。
	1792	寛政4	12/29～	北堀江市のか わ芝居 豊竹此母座	双蝶々曲輪日記	第七 道行(出がたり 岡・久=宗七・ツレ 理吉)、第八 引まどだん(口 鐘、出がたり 切 時=清七)。	あつま(十三郎)、おはや(十三郎)、与兵衛(元五郎)、与次兵衛(重五郎)、ぬれかみ長五郎(東十郎)、与兵へは、(重五郎)。
	1802	享和2	1/29～	道頓堀東の芝居	双蝶々曲輪日記 大序より 八つ目まで	大序(口 十九、おく 雛)、三つ目(口 滝、切 磯)、三つ目(口 むら、おく 紋)、四つ目(口 武、切 綱)、五つ目(津賀)、六つ目(口 頼母、切 内匠)、七つ目(道行 越・頼母・ツレ むら=吉兵衛)、八つ目(口 磯、切 綱)。 ※角書「関取の濡髪/名取の放駒」。	山さき与五郎(清治)、あづま(虎蔵)、みやこ・南与兵へ女房おはや(冠十郎)、南与兵へ(門蔵)、山ざき与次兵へ(音五郎)、ぬれかみ長五郎(音五郎)、はなれごま長吉(千四)、おせく(門蔵)、娘おてる(勢蔵)、かごの甚兵へ(定蔵)、治部右衛門(千四)、長五郎は、(勢蔵)。
△	1808	文化5	5/22～	伊勢 中之地蔵大芝居	(双蝶々廓日記)	六ツ目。 ※『伊勢歌舞伎年代記』に拠る。	
	1810	文化7	7/9～	ほり江あら木 芝居	双蝶々曲輪日記	八わたのだん(口 津賀、切 宮戸)。	おはや(金吾)、十治兵へ(門蔵)、長五郎(伊三郎)、長五郎は、(勢蔵)。
	1811	文化8	1	いなり境内	双蝶々曲輪日記	六ツ目(口 歌代、切 宮戸)、道ゆき(八重・ツレ 歌代、出語出遣ひにて相つとめ申候)。 ※この興行の番付は、文楽の芝居として確認できる最初の興行番付(『義太夫年表 近世篇』)。	与五郎(新吾)、けいせいあづま(門蔵)、おてる(国八)、駕の甚兵へ(新吾)、次部右衛門(紋子)。
	1812	文化9	8/5～	御霊境内	双蝶々曲輪日記	道行 菜種の乱咲(重・倉)、八わたのだん(口 咲、切 染、跡 稲)。 ※角書「関取の濡髪/名取の放駒」。 ※「与五郎 吉田虎蔵/あづま 吉田三吾/人形出づかひにて相つとめ申候」(番付)。	与五郎(虎蔵)、あづま(三吾)、おはや(冠十郎)、南与兵へ(豊吾)、長五郎(三吾)、長五郎母(才九郎)。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1814	文化11	5/15～	伊勢 中ノ地蔵常芝居	双蝶々曲輪日記 大序より 八つ目迄	初段（口 曾我、切 津戸）、二段目（口 加、中 佐賀、かけ合 津賀・むら）、三段目（口 新、かけ合 宮戸・錦・佐賀・加）、四段目（口 津戸、切 津賀）、五段目（新）、六段目（宮戸）、八段目（口 むら、切 綱）。	山崎与五郎（千二郎）、あづま（辰造）、けいせいみやこ・おはや（重五郎）、南与兵へ（千四）、山崎与治兵へ（冠三）、ぬれ髪長五郎（九孝）、はなれ駒長吉（千四）、長吉姉おせき（辰造）、おてる（冠二）、かごノ甚兵へ（九孝）、治部右衛門（彦三）、長五郎母（辰造）。
1814	文化11	6	伊勢 津八わ口町芝居	双蝶々曲輪日記 大序より 八つ目迄	初段（口 曾賀、切 津磨）、二段目（口 加、中 佐賀、かけ合 津賀・むら）、三段目（口 新、かけ合 宮戸・錦・佐賀・加）、四段目（口 津磨、切 津賀）、口段目（新）、口段目（宮戸）、八段目（口 むら、切 綱）。	山崎与五郎（千二郎）、あづま（辰造）、けいせいみやこ・おはや（重五郎）、南与兵へ（千四）、山崎与治兵へ（冠三）、ぬれ髪長五郎（九孝）、はなれ駒長吉（千四）、長吉姉おせき（辰造）、おてる（冠三）、かごノ甚兵へ（九孝）、治部右衛門（彦三）、長五郎母（辰造）。
1814	文化11	9/15～	北 新 地	双蝶々曲輪日記 大序より 八つ目まで	大序 浮みせのたん（口 雛、おく 祖）、忒 すもふのたん（口 入、中 佐賀、かけ合 宮戸・土佐）、三 茶やのたん（口 絹、かけ合 佐賀・祖・入・津賀）、四 米やの段（弥）、五 なんはうらの段（入）、六 橋もとのたん（口 多賀、切 宮戸）、八 八わたのたん（口 絹、切 土佐）。 ※「橋もとのたん・口」の竹本多賀太夫を竹本佐賀太夫とする別番付あり。	山さき与五郎（千次郎）、あづま（辰造）、みやこ・おはや（重五郎）、南与兵へ（千四）、山さき与治兵へ（冠三）、濡かみ長五郎（九孝）、はなれこま長吉（千四）、姉おせき（辰造）、娘おてる（重三郎）、かこの甚兵へ（九孝）、はしもと治部右衛門（彦三）、長五郎母（重三郎）。
1815	文化12	1/15～	京 六角堂境内芝居	双蝶々曲輪日記 大序ヨリ 九段目マデ	清水の段（口 沢、中 稲、切 百合）、相撲場の段（口 稲、中新、かけ合 氏・津賀）、揚屋の段（口 絹、かけあい 河内・伊達・絹・宮戸）、米屋の段（氏）、難波うらの段（新）、橋本の段（宮戸）、八 幡場の段（口 伊達、切 土佐）、勸進寺の段（口 絹、おく 津賀）。	与五郎（千治郎）、あづま（辰造）、みやこ・おはや（重五郎）、なん与兵へ（千四）、与治兵へ（冠三）、長五郎（九孝）、放駒長吉（千四）、おせき（辰造）、娘おてる（重三郎）、かごの甚兵へ（九孝）、治部右衛門（彦三）、はゞ（重三郎）、竹右衛門（冠三）、娘おとら（辰造）。
1815	文化12	7/29～	いなり境内	双蝶々曲輪日記 大序より 八つ目まで	大序（鶴）、角力場のたん（かけ合 中・筆）、米屋のたん（口 津、切 要）、難波うらのたん（十七）、橋本のたん（口 染、切 重）、みち行（重・ツレ 津）、八わたのたん（口 吾、切 染）。 ※角書「関取の濡髪ノ名取の放駒」。	与五郎（兵吉）、あづま（国八）、おはや（小六）、南方十次兵へ（冠四）、山ざき与次兵へ（佐造）、長五郎（文吾）、長吉（兵吉）、おせき（国八）、おてる（東十郎）、かごの甚兵へ（文吾）、治部右衛門（小六）、長五郎母（勢蔵）。
1816	文化13	閏8/8～	名古屋 清寿院御境内	双蝶々曲輪日記 大序より 八つ目迄	清水の段（鯉津、豊、美和）、角力の段（梅、入、美和、むら、津摩）、米屋の段（染、津賀）、難波浦段（梶）、橋本の段（津摩、津賀）、八幡の段（むら、綱）。	与五郎（弥三郎）、あづま（辰造）、おはや（重五郎）、南与兵へ（才治）、与治兵へ（文吾）、濡髪長五郎（文吾）、放駒長吉（兵吉）、おせき（辰造）、おてる（文二）、かごの甚兵へ（兵吉）、治部右衛門（才治）、長五郎はゞ（伝七）。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1817	文化14	7/28~	御霊社内	双蝶々曲輪日記	角力場のだん（口 鯉津、おく 虎、次 千賀、カケ合 頼・吾）、米やのだん（口 房、切 津賀）、なんば浦の段（千賀）、はし本のだん（口 染、切 錦）、道ゆき（頼・ツレ 房）、口はたのだん（口 頼、切 政）。	与五郎（才治）、あづま（金吾）、おはや（冠十郎）、南与兵へ（金吾）、与次兵へ（門二）、長五郎（才治）、長吉（金四）、おせき（東造）、おて口（勢造）、駕の甚兵へ（弥三郎）、治部右衛門（冠吾）、長五郎母（冠吾）。
1819	文政2	8/19~	名古屋 清寿院御境内	双蝶々曲輪日記	橋本の段（勝、宮戸）。	山ざき与五郎（金四）、ふじやあづま（国八）、じやうくわん（金吾）、おてる（重三郎）、かごかき甚兵へ（新吾）、治部右衛門（弥三郎）。
1820	文政3	4/8~	いなり境内	双蝶々曲輪日記	茶屋のたん（かけ合 入・島・久・桑）、米やのだん（口 島、切 梶）、なんばうらの段（入）、引まどのだん（口 むら、切 時）。 ※角書「関取の濡髪／名取の放駒」。	与五郎（千助）、あづま（虎蔵）、みやこ（新治）、南与兵へ（千四）、長五郎（千治郎）、長吉（才治）、おせき（辰五郎）、長五郎母（千柳）。
1820	文政3	11/20~	名古屋 若宮操芝居	双蝶々曲輪日記	八つ目（伊勢、時＝仙左衛門）。	おはや（三吾）、南与兵へ（千治郎）、長五郎（弥三郎）、十次兵へ母（林三郎）。
1823	文政6	3/6~	江戸 結城座	双蝶々曲輪日記	※角書「関取濡髪／名取放駒」。 ※2枚番付の1枚カ（『義太夫年表 近世篇』）。	（不明）
1823	文政6	9/9~	座摩社内	双蝶々曲輪日記 十冊続	浮見せのたん（口 弥生、中 桑、奥 の）、角力場のたん（口 土勢、次 長門、切 かけ合 播磨大掾・染）、揚屋の段（口 生駒、切 かけ合 伊勢・長門・土勢・の・梶）、米屋のだん（弥）、難波裏の段（生駒）、橋本のたん（口 伊勢、切 染）、道ゆき（伊勢・ツレ 生駒）、八幡のたん（口 梶、切 播磨大掾）、観真寺のたん（口 長門、切 弥、梶）、捕者のだん（かけ合 土勢・の・桑・弥生・国）。	山崎与五郎（仙四）、ふじやあづま（伝七）、女房おはや（伝七）、南与兵へ（仙四）、山崎与次兵へ（弥三郎）、濡髪長五郎（弥三郎）、放駒長吉（仙助）、姉おせき（伝七）、娘おてる（亀七）、駕ノ甚兵へ（仙四）、橋本次部右衛門（仙助）、与兵衛母（林三郎）、まぼろし竹右衛門（林三郎）、竹右衛門娘（伝七）。
1825	文政8	9/7~	稲荷社内	双蝶々曲輪日記	橋本のだん（口 入、切 湊）、みちゆき 菜種の乱咲（文字・ツレ 錦＝勇造・大三、長五郎 吉田千四／与五郎 吉田才治／あづま 吉田辰五郎／右人ぎやう出づかひ出がたりにて相つとめ申候）。	与五郎（才治）、あづま（辰五郎）、浄閑（熊造）、長五郎（仙四）、娘おてる（辰造）、駕の甚兵へ（仙四）、治部衛門（小六）。
1827	文政10	8/16~	江戸 肥前座	双蝶々	八幡むらの段（口 門、切 染）。	おはや（伊三郎）、重治兵衛（半三郎）、濡髪長五郎（新十郎）、はゞ（重五郎）。
1829	文政12	1/19~	御霊社内	双蝶々曲輪日記 橋本の段 道行	橋本のだん（口 歌門、中 時、切 湊）、道行 菜種の乱咲（頼・ツレ 久）。	山崎与五郎（金四）、けいせいあづま（国八）、山崎与次兵へ（新四）、娘おてる（右造）、駕ノ甚兵衛（金吾）、橋本治部右衛門（小六）。
1829	文政12	7/1~	御霊社内	双蝶々曲輪日記	八わたのだん（口 音羽、切 高麗）。 ※「夏景色みどり操 納涼六床」の内。	おはや（東十郎）、南与兵へ（才治）、長五郎（与十）、長五郎母（辰五郎）。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
1830	文政13	3/25～	名古屋 清寿院御境内	双蝶々曲輪日記	橋本のだん（口 谷、切 音ノ駒、右一日替りニ相勤申候）、道行（シテ 音羽・ワキ 岩・ツレ 藤）。 ※「あづま 吉田三吾ノ与五郎 吉田金四ノ右出がたり人ぎやう出つかひにて相勤申候」（番付）。	与五郎（金四）、あづま（三吾）、与治兵へ（金助）、おてる（喜十郎）、甚兵へ（与吉）、治部右衛門（清七）。	
1830	文政13	4/29～	いなり境内	双蝶々曲輪日記 組合八番	発端（口 桑、次 鹿、おく 勇）、清水のだん（口 巴津、次 弓、中 歳、おく 高）、新町揚屋のだん（口 桐、中 島、切 岡）、相撲場のだん（口 八木、おく 三根、かけ合 岡・淀・久）、米屋のだん（口 淀、切 巴）、難波裏のだん（口 島、おく 久）、橋本のだん（口 三根、切 春）、八幡のだん（口 久、切 巴）。 ※角書「関取は濡髪ノ名取は放駒」。 ※語り「勝負のしやうぶ附は詞かさなる姉の異見身にせまる鍔ぎはぬきさしならぬ八幡の目釘竹ノ身請に身うけの手附かさね戸棚の封印とくにとかれぬあづまがおもひは山崎の菜種畑」。	山さぎ与五郎（辰造）、けいせいあづま（辰五郎）、おはや（辰造）、南方十次兵へ（才治）、山崎与次兵へ（与十）、濡髪長五郎（岩五郎）、放駒ノ長吉（与十）、姉おせき（辰五郎）、娘おてる（重五郎）、かごノ甚兵へ（才治）、橋本治部右衛門（朝右衛門）、長五郎母（三左衛門）。	
1830	文政13	5/20～	いなり境内	双蝶々曲輪日記 大序より 四つ目迄	発端（口 桑、次 鹿、おく 勇）、清水のだん（口 巴津、次 弓、中 歳、おく 高）、新町揚屋のだん（口 桐、中 島、切 岡）、相撲場のだん（口 八木、おく 三根、かけ合 岡・淀・久）、米屋のだん（口 淀、切 巴）。 ※前項興行の「難波裏のだん」以降を別狂言に差し替えた興行。	山さぎ与五郎（辰造）、けいせいあづま（辰五郎）、おはや（辰造）、南方十次兵へ（才治）、山崎与次兵へ（与十）、濡髪長五郎（岩五郎）、放駒ノ長吉（与十）、姉おせき（辰五郎）、娘おてる（重五郎）、かごノ甚兵へ（才治）、橋本治部右衛門（朝右衛門）、長五郎母（三左衛門）。	
1832	天保3	4/14～	いなり境内	双蝶々曲輪日記 三場一まく	難波裏の段（内匠）、橋本の段（住）、道行 菜種の乱れ咲（岩・ツレ 理、跡 歳、富士）。	与五郎（金四）、あづま（国八）、有右衛門（新五郎）、与次兵へ（門三）、濡髪長五郎（東十郎）、放駒長吉（岩五郎）、娘おてる（清七）、駕ノ甚兵へ（門蔵）、治部右衛門（東十郎）。	
1833	天保4	11/21～	稲 荷 境 内	双蝶々曲輪日記	八幡の段（口 長門、切 住）。	女房おはや（東十郎）、南与兵へ（門蔵）、濡髪長五郎（金四）、長五郎母（辰五良）。	
△	1842	天保13	6下旬	中 の 芝 居	（双蝶々） 引窓（梶）。 ※『大歌舞妓外題年鑑』に拠る。		
	1842	天保13	6	天神社内北門 芝居	双蝶々曲輪日記 大序ヨリ 八つ目まで	大序（口 和）、浮瀬のだん（次 瀬戸、おく 津）、揚屋の段（口 梶戸、切 万）、相撲場の段（口 弥蘇、次 巴枝、奥 かけ合 長吉一時・長五郎一綾）、米屋のだん（口 津、切 琴、君）、芝居うらの段（口 梶戸、おく 巴枝）、橋本のだん（口 多賀、中 万、切 梶）、菜種ノ道行（綾・ツレ 巴枝）、八幡のだん（口 琴、切 咲）。 ※角書「関取は濡髪長五郎ノ名取は放駒長吉」。 ※語り「勝負のしやうぶ附は詞かさなる姉の異見身にせまる鍔ぎはぬきさしならぬ八幡の目釘竹ノ身請に身うけの手附かさね戸棚の封印とくにとかれぬあづまがおもひは山崎の菜種畑」。	山崎与五郎（才造）、あづま（清十郎）、みやこ（国八）、おはや（清十郎）、十次兵へ（辰之助）、十次兵へ（新吾）、長五郎（国五郎）、長吉（新吾）、おせき（清十郎）、嫁おてる（国三郎）、甚兵へ（国五郎）、はし本治部右衛門（文五郎）。
△	1842	天保13	11	名古屋 若 宮	（双蝶々） （呂角齋＝才治）。 ※素浄瑠璃。 ※『小寺玉晁記録』中の書写番付に拠る。		

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
1843	天保14	3	奈良 なら芝居	双てう／＼ ハツ目	八わたノ段（豆大事 大豆）。	おはや（仙子）、十次兵へ（冠造）、長五郎（一橋）、長五郎母（歌六）。	
1843	天保14	10	道頓堀竹田芝居	双蝶々曲輪日記 ハつ目	南与兵衛内のだん（当久、播満）。	女房お早（清十郎）、南与兵へ（門蔵）、長五郎（喜十郎）、長五郎母（国八）。	
1844	天保15	4	京 宮川町芝居	双蝶々曲輪日記	八わたの段（口 蔦、切 津賀）。	（不明）	
△	1844	天保15	10/22	阿波 撫 養 林 崎	（双蝶々曲輪日記）	引窓（梶＝広作）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
△	1844	天保15	10/28～30	阿波 井 の 内	（双蝶々）	引窓（口 梶戸、切 梶）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
1844	天保15	10	京 四条南側大芝居	双蝶々曲日記	八わたのだん（口 氏尾、切 文字）。	おはや（国八）、南方与兵へ（金四）、長五郎（重八）。	
1845	弘化2	10	名古屋 若宮御社内	双 蝶 々	引窓（田組）。		
△	1847	弘化4	11/20	江戸茅場町 高 松 亭	（双蝶々）	八（梶）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
1848	弘化5	2/22～	名古屋 清寿院境内	双蝶々曲輪日記	六つ目（浪花＝米作）。		
△	1848	嘉永1	12/19	江州 長 浜	（双蝶々）	ハツ目（梶）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
1849	嘉永2	3/7～	名古屋 若宮御社内	双 蝶 々	橋本の段（三国）。 ※「子供浄瑠璃」の内。		
1849	嘉永2	4上旬	備中 松 []	双 蝶 々	（咲）。	あつま（政吉）、口甚兵衛（清左衛門）。	
1853	嘉永6	7/23～	新築地清水町 浜小家	双蝶蝶曲輪日記 組合八番	大序（鹿、曾根）、清水の段（咲美）、新町揚屋の段（口 当勢、中 三国、切 当久）、相撲場のたん（口 当勢、カケ合 湊・実）、米屋のだん（中 町、切 咲）、難波浦の段（口 音賀、おく 佐賀）、橋本のだん（中 三国、切 湊）、八幡のだん（中 当久、切 巴）。 ※角書「関取は濡髪ノ名取は放駒」。		
△	1853	嘉永6	11/21～22	播州 明石平松山	（双蝶々）	八わたのだん（内匠＝源吉改 広助）。	
			11/22		引窓のだん（内匠＝源吉改 広助）。		
			11/30		六 橋本のだん（内匠＝源吉改 広助）。 ※『弥太夫日記』に拠る。		
1855	安政2	9	京 四条北側大芝居	双蝶々曲輪日記 六つ目	橋本のだん（口 浪、切 内匠）。 ※人形役割を、甚兵へ（文三）、与五郎（兼三郎）、あづま（冠十郎）、治部右衛門（喜十郎）、与次兵へ（勇蔵）とする別番付あり。	与五郎（千四）、あづま（兵吉）、与次兵衛（兼三郎）、おてる（国三郎）、かごの甚兵衛（千四）、治部右衛門（文三）。	
1857	安政4	2/28～	法善寺浄るり 席	双 蝶 々	六つ目（咲）。		

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1858	安政5	5/5~	京 四条道場北小 家	双 蝶 々	橋本の段（大坂 磯＝清三郎）。 ※「かけゑ」浄瑠璃。	
1858	安政5	10/26~	京 寺町道場北新 席	双 蝶 々	引まと（八十）。	
△	1858	安政5	紀州 和歌山紺屋町	（双蝶々曲輪 日記）	橋本（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	1859	安政6	泉州 深 日	（曲輪日記）	橋本（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
	1859	安政6	5 稻荷社内東芝 居	双蝶々曲輪日 記 組合八番	大序（和、岩戸、勝見、千鳥）、清水のたん（口 百合、おく 氏）、 新町のだん（中 喜志、次 佐賀、切 むら）、相撲場の段（口 実、カ ケ合 染・春）、米屋のたん（中 佐賀、切 咲）、難波裏のだん（口 和国、おく 当久）、橋本のだん（中 氏、切 湊）、八幡のだん（中 咲、切 染）。 ※角書「関取は濡髪ノ名取は放駒」。 ※番付の2本に「廿日より」（ただし1本は難読）の書込みがあり、祐 田善雄『近世邦楽年表 義太夫節之部』書入れには「十八日より（南 木氏番付）」とある（『義太夫年表 近世篇』）。	山崎与五郎（才造）、けいせいあつま（兵 花）、おはや（新五郎）、南方十次兵衛（清 七）、山さき与次兵衛（金花）、濡髪長五郎 （文三）、放駒長吉（玉造）、姉おせき（兵 吉）、嫁おてる（竹吉）、駕ノ甚兵衛（才 治）、橋本治部右衛門（才三郎）、長五郎母 （兵花）。
△	1859	安政6	9/18 紀州 道成寺門前小 家	（双蝶々曲輪 日記）	はし本（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	1859	安政6	10/17 紀州 和歌山久保町	（双蝶々）	橋本（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
	1860	万延1	4/5~ 京 四条道場北ノ 小家	双 蝶 々	引窓（高麗＝亀助）。	
△	1860	万延1	5 法 善 寺	（双蝶々曲輪 日記）	引窓の段（口 源氏＝泰治、切 要＝勝糸）。 ※『近世邦楽年表 義太夫節之部』に拠る。	
	1864	文久4	1/29~ 京 和泉式部北向	双 蝶 々	八つ目（尾上＝鶴太郎）。 ※素浄瑠璃。	
	1864	元治1	4/20~ 天満天神社内 戎門	双 蝶 々	角力場ノだん（河内）。橋本の段（口 河内、切 田組）。	
	1865	慶応1	9/9~ 京 伏見ほうき町 芝居	双 蝶 々	橋本ノ段（咲＝伝吉）。	
	1866	慶応2	3/23~ 京 四条道場北ノ 小家	双 蝶 々	橋本ノ段（相模＝団六）。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1866	慶応2	9/9～	京 四条道場北の 小家	双蝶々	引窓ノ段（相模＝弥作）。	
1867	慶応3	7/23～	京 四条道場北ノ 小家	双蝶々	引窓ノ段（相模＝時造）。	
1868	明治1	11/15～	いなり社内東 芝居	双蝶々曲輪日 記 大序より 四段目迄	大序（豊、旭、稲、七、咲馬）、浮無瀬の段（咲代、左馬）、相撲場 のだん（口 春戸、切 かけ合 中・染子）、米やのたん（口 理久、次 実、切 巴）、難波裏の段（和）、橋本のだん（中 音羽、切 湊）、八 幡のだん（中 中、切 染＝叶）。 ※角書「関取は濡髪ノ名取は放駒」。 ※初日は番付の書込みによるが、『文楽今昔譚』の10月、『野沢の面 影』の12月説もある（『義太夫年表 近世篇』）。	山崎与五郎（玉助）、けいせい吾妻（辰造）、 けいせい都・女房おはや（喜十郎）、南与兵へ （玉造）、山崎与次兵へ（玉之助）、濡髪長五 郎（玉之助）、放駒長吉（辰之助）、姉おせき （小玉）、嫁おてる（市造）、駕の甚兵へ（喜 十郎）、橋本治郎右工門（玉造）、長五郎母 （辰造）。
1871	明治4	1/2～	京都 道場北ノ小家	双蝶々曲輪日 記 六ツ目	橋本のたん（口 須廣、切 浜）。	
1875	明治8	11	竹田 芝居	双蝶々	八ツ目（春子＝九市）。 橋本（津＝才治）。	
1877	明治10	2/13～	弁 天 座	双蝶々 （双蝶々曲輪 日記）	橋本（津）。 引まど（頼）。 ※故人太鼓卯之助追善「過し日のノ其年月もノめぐり来て 連営手向 の薫樹 礼拝三度」の内。 ※日程は番付欄外の墨書に拠る。	
1877	明治10	3	御霊社内小家	双蝶々曲輪日 記 大序より 八つ目迄	大序（福寿）、浮無瀬のだん（広、呂子、小音、幾嶋、光、靱茂）、 新町のだん（口 小文字、中 の、次 田古、切 富司）、相撲場のだん （口 和、靱栄、かけ合 新靱・呂）、米やのだん（口 靱登、中 新 靱、切 文字）、難波裏の段（口 十三、次 頼）、橋本の段（中 仮 名、切 嶋）、八幡のだん（中 頼、切 呂）。 ※角書「関取の濡髪ノ名取の放駒」。	山崎与五郎（駒十郎）、藤やあづま（鹿造）、 女郎都・女房おはや（冠四）、南与兵衛（辰五 郎）、山崎与次兵へ（冠四）、濡髪長五郎（駒 十郎）、放駒長吉（勇造）、姉お関（喜市）、 むすめおてる（喜市）、駕甚兵衛（喜十郎）、 橋本次部右工門（栄造）、与兵衛母（鹿造）。
1878	明治11	1	名古屋 愛 栄 座	双蝶々	ひきまど。 ※太夫 竹本越路太夫。素浄瑠璃カ。	
1879	明治12	1/1～3	京都 道 場 演 劇	双蝶々	橋本のだん（嶋＝新三郎）。	
△ 1879	明治12	1/28	東京 両国中村楼	（双蝶々）	橋本の段（田組＝綱蔵）。 ※冠治改め五代目西川伊三郎の名弘め。 ※演芸資料選書・5『東京の人形浄瑠璃』に拠る。	
1880	明治13	1/1～	京都 北 側 演 劇	双蝶々	橋本之段（津＝才治）。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
1880	明治13	3/1~	京都 道場演劇	双蝶々	引まど(相模=広左衛門)。 ※「一世代 竹本山四郎」(番付)。 ※興行年次は「朝日新聞(大阪版)」(3月9日)を参考にしたが明治14年の可能性もある(『近代歌舞伎年表 京都篇』)。		
△	1884	明治17	4	京都 四条北芝居	(双蝶々曲輪 日記)	橋本(弥=大助)。 ※「弥太夫興行年表」(『五世竹本弥太夫 芸の六十年』)に拠る。	
	1885	明治18	10/6~	彦六座	双蝶々曲輪日記 大序より 八つ目迄	大序(彦、三輪、富司登、組尾、源枝)、第一 浮瀬の居つゞけに合図の笛うり(鹿、住の、組代)、第二 揚や町のいきづくに小指の身替り(中組子、次生嶋、切町)、第三 相撲の花扇に異見の親骨(口若靱、かけ合源・朝、此所出つかひにて御覧に入申候)、第四 大宝寺町の立引に兄弟のちなみ(口津代、中山登、切越=*吉三郎)、第五 芝居裏のけんくわに難波のどろどろ(口組路、奥富司)、第六 橋本の辻駕籠に相輿の欠落(中千駒、切大隅)、第七 道行菜種の乱咲(シテ富司・ワキ袖・ツレ芳・ツレ住の、此所出つかひ早替りにて御覧に入申候 吉田才治 吉田辰五郎)、第八 八幡の親里に血筋の引まど(中越、切組)。 ※角書「関取は濡髪長五郎ノ名取は放駒長吉」。 ※『千賀女日記』には「七日ヨリ十一月十日マデ」とある。 ※「芸題投票ニヨリ決メタ旨ノ口上看板アリ」(『義太夫年表 明治篇』)。	山崎与五郎(辰五郎)、けいせいあづま(三吾)、けいせいみやこ(松江)、女房おはや(三吾)、南与兵衛(辰五郎)、山崎の与次兵へ(兵吉)、濡髪長五郎(兵吉)、放駒長吉(亀松)、娘おせき(門造)、嫁おてる(門造)、駕の甚兵へ(才治)、橋本治郎右衛門(栄造)、与兵衛の母(才治)。
△	1888	明治21	1/27	京都 南側劇場	(双蝶々)	橋本(仮名=喜鳳)。 ※文楽座。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1888	明治21	4/1	京都 坂井座	(双蝶々)	引窓(組)。 ※大坂彦六座。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1889	明治22	8/8 8/9	京都 北側演劇場	(双蝶々)	橋本の段(津=勝七)。 引窓(路=鶴太郎)。 ※文楽座、越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1889	明治22	12/14	名古屋 千歳座	(双 蝶)	引窓(路=鶴太郎)。 ※竹本越路太夫・豊沢広介一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1891	明治24	1/15	名古屋 末広座	(双蝶々)	引まどの段(路=花助)。 ※竹本越路太夫・豊沢広助一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
	1891	明治24	2/15~	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より 四段目まで	大序 浮瀬のだん(相寿、呂嘉、谷路、津子、鶴尾)、清水のだん(呂勢、品尾、越広)、相撲場のだん(中津和、かけ合相生・さの)、米屋のだん(中調、切綾、谷)、難波裏のだん(相生)、橋本のだん(中巴勢、切呂)、八幡のだん(中さの、切津=吉兵衛)。 ※角書「濡髪長五郎ノ放駒長吉」。 ※「二月十五日ヨリ三月十九日マデ卅一日間」(『義太夫年表 明治篇』)。	山崎与五郎(金之助)、けいせい吾妻(金之助)、けいせい都太夫・女房おはや(紋十郎)、南与兵衛(玉造)、山崎与次兵へ(玉治)、濡髪長五郎(玉助)、放駒長吉(金之助)、姉おせき(紋十郎)、嫁おてる(玉助)、駕甚兵へ(玉造)、橋本治郎右衛門(紋十郎)、長五郎母(玉治)。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1891	明治24	8/6	京都 道場座	(双蝶々) 引窓の段(谷=八兵衛)。 ※竹本津太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1891	明治24	8/19 8/20	京都 北座	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(路)。 橋本(呂)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1892	明治25	1/27	京都 北座	(双蝶々曲輪 日記) 橋本(呂=勝鳳)。 ※竹本越路太夫・豊沢広助一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1892	明治25	7/29	名古屋 千歳座	(双蝶々) 橋本(呂=勝鳳)。 ※文楽・彦六両座合併「大阪浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1892	明治25	8/16	名古屋 千歳座	(双蝶々) 引窓の段(阿蘇=勝友)。 ※竹本朝太夫・豊竹新靱太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1892	明治25	8/18 8/24	京都 北座	(双蝶々) はし本(呂=勝鳳)。 引窓(路=小庄)。 ※竹本越路太夫・豊沢広助・其外文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
	1893	明治26	1	彦六座	双蝶々曲輪日 記 取組二番 第一取組 橋本の辻駕籠相替(ママ)の欠落(中 菅、切 越=吉弥)、 第二取組 八幡の親里に血筋の引まど(中 山登、切 組)。 ※角書「関取は濡髪長五郎/名取は放駒長吉」。	与五郎(友右衛門)、けいせいあづま(三 吾)、女房おはや(三吾)、南与次兵へ(玉 松)、山崎与次兵へ(栄造)、濡髪長五郎(玉 米)、放駒長吉(栄三)、娘おてる(紋之 助)、駕の甚兵へ(亀松)、橋本次郎右工門 (門造)、母お蝶(鹿造)。
△	1893	明治26	3/9 3/10	京都 北座	(双蝶々) 引窓(路=小庄)。 橋本(呂=勝鳳)。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1893	明治26	8/12	名古屋 末広座	(双蝶 蝶) 橋本(呂=勝鳳)。 ※竹本越路太夫・豊沢広助一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1893	明治26	8/16	京都 南座	(双蝶々) 引窓(路)。 ※越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1893	明治26	10/13	名古屋 音羽座	(双蝶蝶) 引窓(緑=滝造)。 ※竹沢弥七一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1894	明治27	2/2 2/4	京都南座	(双蝶々) 引窓(路)。 はし本(呂)。 ※越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1894	明治27	2/14	京都南座	(双蝶々) 橋本之段(越)。 ※彦六一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1894	明治27	12/18 12/21	京都南座	(双蝶々) 引窓(美奈)。 橋本の段(美奈)。 ※呂太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1895	明治28	6/30	東京新声館	(双蝶々) 引窓の段(駒=団八)。 ※第1回義太夫大演芸会。 ※演芸資料選書・5『東京の人形浄瑠璃』に拠る。	
△	1895	明治28	8/13	名古屋千歳座	(双蝶々) 引まど(調=文二郎)。 ※大坂文楽、豊竹呂太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1896	明治29	2/12	名古屋千歳座	(双蝶々) 引窓(梅)。 ※竹本越太夫・七五三太夫・新鞠太夫・菅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1896	明治29	7/30 8/2	京都南座	(双蝶々) はし本(弥)。 引窓(さの)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1896	明治29	10/4	京都南座	(双蝶々) はし本(越)。 ※大隅太夫・団平一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
	1897	明治30	5/1~	稲荷座	双蝶々曲輪日記 大序より四段目迄 大序 浮無瀬のだん(弥登、生栄、此子、源路、弥雲、弥駒)、勝曼坂のだん(隅栄、品、小野)、清水のだん(磯、雲龍)、相撲場のだん(口 弥生、濡髪長五郎-伊達・放駒長吉-春子、此所人形出つかひにて御覧に入申候)、米屋のだん(中 菊、次 小隅、切 生嶋)、難波裏のだん(雛)、辻駕のだん(源子)、橋本のだん(切 越改 住、此所人形出つかひにて御覧に入申候)、八幡のだん(中 長子、切 弥)。 ※角書「濡髪長五郎/放駒長吉」。 ※「(五世住太夫の)襲名披露の役場時間早き為め、弥太夫は気の毒に思ひ自分役場と前後振替へて前に語り、彼を後にして花を持たせてやつた」(『五世竹本弥太夫 芸の六十年』)。	山崎与五郎(栄三)、けいせいあづま(亀松)、けいせい都太夫・女房おはや(簗助)、南与兵へ・南方十次兵へ(玉松)、山崎与次兵へ(駒十郎)、濡髪長五郎(駒十郎)、放駒長吉(玉米)、姉おせき(清十郎)、むすめおてる(三十郎)、駕かき甚兵へ(清十郎)、橋本次部右工門(宗七)、長五郎母(清十郎)。
△	1897	明治30	7/9	名古屋千歳座	(双蝶々) 橋本屋(住=小团治)。 ※竹本組太夫・住太夫・朝太夫・伊達太夫合併大一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1898	明治31	8/3	京都南座	(双蝶々) (文)。 ※竹本文字太夫(佐野太夫改め)・竹本文太夫・竹本七五三太夫・竹本高尾太夫等の一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1898	明治31	8/22	名古屋御園座	(双蝶々) 橋本(文=重太郎)。 ※大阪文楽座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
	1898	明治31	9	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より八幡駅まで 大序 浮無瀬のだん(越広、綾次、さ字、稲葉、谷登、津直、谷勢)、清水坂のだん(源子、越可、呂子、越江、呂嶋、巴勢)、相撲場のだん(口 越登、長五郎一七五三・長吉一呂瀬改 司)、米屋喧嘩のだん(中 登勢、切 染)、難波裏のだん(むら)、橋本のだん(中 叶、切津=吉兵衛)、八幡之里引窓のだん(中文、切 呂=勝鳳)。 ※角書「濡髪長五郎/放駒長吉」。 ※「九月十一日ヨリ十月十日マデ卅日間」(『義太夫年表 明治篇』)。 ※「橋本のだん・切」の三味線は『野沢の面影』に拠る。 ※初日より吉田金之助休演、放駒長吉を吉田栄三が代演(『吉田栄三自伝』に拠る)。	山崎与五郎(助太郎)、傾城あづま(三吾)、傾城都(玉亀)、女房お早(玉五郎)、笛売与兵へ・南方十次兵へ(玉造)、山崎与次兵へ(玉治)、濡髪長五郎(玉助)、放駒長吉(金之助)、姉おせき(玉五郎)、娘おてる(玉六)、駕昇甚兵へ(玉造)、治郎左工門(紋十郎)、長五郎母(玉治)。
△	1898	明治31	12/15	名古屋御園座	(双蝶々) 橋本(住=小団二)。 ※大阪 大隈(ママ)一座・東京 朝太夫一座による「京阪合併浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1899	明治32	1/16	京都南座	(双蝶々) 引窓(柳適)。 ※柳適太夫・春子太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1899	明治32	3/13	名古屋末広座	(双蝶々) 八幡引窓(柳適=仙二郎)。 ※大阪稲荷座若手一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1899	明治32	京都南座	(双蝶々)	橋本(文=大三郎)。	
7/29		引窓(文=大三郎)。				
8/1		(双つ蝶々) 橋本内(呂=勝鳳)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。				
△	1899	明治32	9/6	名古屋末広座	(双蝶々) 橋本(住)。 ※住太夫・春子太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1899	明治32	12/23	京都南座	(双蝶々) 引窓(文字=猿糸)。 ※竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1900	明治33	7/26	京都南座	(双蝶々) はし本(呂)。 ※文楽座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1900	明治33	12/4	名古屋 末広座	(双蝶々) 橋本屋(住=小団二)。 ※明楽座一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1901	明治34	2/4	名古屋 御園座	(双蝶々) 引窓(柳適=市兵衛)。 ※竹本組太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1901	明治34	4/11	京都 弁天座	(双蝶々) (津和)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1901	明治34	7/26	名古屋 歌舞伎座	(双蝶々) 橋本の段(文=三二)。 ※越路太夫・文字太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1901	明治34	8/8	京都 南座	(双蝶々) 橋本(津)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1901	明治34	8/20	京都 幾代亭	(双蝶々) 引窓(柳適)。 ※組太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1901	明治34	12/13	名古屋 末広座	(双蝶々) 橋本屋(住=小団二)。 ※住太夫・朝太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1902	明治35	8/27	京都 歌舞伎座	(双蝶々) 橋本屋(住)。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
	1902	明治35	11/1~	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より 引窓迄 大序 浮無瀬のだん(三滝、千代、文字子、桂、須磨、いさ、都、宇久、広、南勢、津磨、越見)、清水坂のだん(越喜、小常、さ字、津国、津ばさ、谷登、谷代、越可、谷栄、豊、登勢、殿母)、相撲場のだん(口津直、長五郎-南部・長吉-津ばめ)、米屋喧嘩出入のだん(中山城、切染)、難波裏のだん(津ばめ=*勝太郎)、橋本のだん(中源子、切呂=勝鳳)、八幡の里引窓のだん(中叶、切津=*猿糸)。 ※角書「濡髪長五郎/放駒長吉」。 ※「十一月一日ヨリ十二月二日マデ」(『義太夫年表 明治篇』)。 ※「橋本のだん・切」の三味線は『野沢の面影』に拠る。 ※「猿糸引ツゞキ津ノ三味線ヲ弾ク、綱造病氣ニツギつばめヲ勝太郎弾ク」(『古鞆太夫床年譜』)。	山崎与五郎(助太郎)、けいせい吾妻(玉六)、けいせい都・女房おはや(栄三)、南与兵衛・南方十次兵衛(多為蔵)、山崎与次兵衛(玉助)、濡髪長五郎(玉助)、放駒長吉(多為蔵)、姉おせき(助太郎)、娘おてる(栄三)、駕舁甚兵衛(玉造)、舅次部右衛門(紋十郎)、長五郎の母(三吾)。
△	1903	明治36	9/8	京都 南座	(双蝶々曲輪日記) 橋本(文)。 ※文字太夫改め越路太夫・むら太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1905	明治38	2/27	名古屋 新守座	(双蝶々) 橋本(住)。 ※竹本住太夫・竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1905	明治38	9	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より 引窓	大序 浮無瀬のだん（若狭、秀、関、富子、喜、いさ、広見、字久、須磨、広＝大糸、一弥）、清水坂のだん（南勢＝一糸、隅の＝大四郎、津磨＝猿松、津国＝広仁、谷登＝清五郎、越可＝大之助、登勢＝猿作）、相撲場のだん（口 静＝吉助、長五郎一文・長吉＝源子＝玉助）、新町場屋のだん（中 津直＝吉兵、次 司＝団福、切 勢見＝三二）、米屋の内喧嘩のだん（中 富＝豊之助、文＝勝鳳、切 七五三＝勇造）、難波裏のだん（源子＝吉松）、橋本のだん（中 越喜、切 染＝広作）、八幡の里引窓のだん（中 叶＝大三郎、切 大隅＝清六）。 ※角書「関取は濡髪長五郎／名取は放駒長吉」。 ※「九月二十二日ヨリ十月廿二日マデ」（『義太夫年表 明治篇』）。 ※「甚兵衛は多為蔵さんで、与治兵衛と治部衛門とのセリ合を止める所で、草鞋穿きの儘飛び上つて、暫くしてから気が付き、草鞋を脱ぐ型をして居られましたが、只今、私が甚兵衛を遣ひますと、この通り演つて居ります」（『吉田栄三自伝』）。	山崎与五郎（玉治郎）、けいせいあづま（政筆）、けいせい都・女房お早（玉五郎）、南与兵衛・南方十次兵衛（玉助）、山崎与次兵衛（玉助）、濡髪長五郎（多為蔵）、放駒長吉（栄三）、姉おせき（玉五郎）、娘おてる（玉五郎）、駕甚兵衛（多為蔵）、橋本次部右衛門（紋十郎）、長五郎の母（門造）。
△	1906	明治39	京都 南 座	（双蝶々） （双蝶々曲輪 日記）	橋本（住）。 引窓（さの）。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1906	明治39	名古屋 歌 舞 伎 座	（双蝶々）	引窓（津ばめ＝勝太郎）。 ※竹本津ばめ太夫ほかによる「大阪若手浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1907	明治40	名古屋 御 園 座	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（常子）。 ※大阪文楽座、竹本越路太夫・メ太夫・南部太夫・時太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1908	明治41	京都 南 座	（双蝶々）	橋本（長子）。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1908	明治41	中 座	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（長子）。 ※竹本大隅太夫・豊沢団平一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	1908	明治41	京都 南 座	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（常子＝一弥）。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1908	明治41	東京 歌 舞 伎 座	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（常子）。 ※竹本撰津大掾一座。素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1909	明治42	5/1~	堀江座	双蝶々曲輪日記	米屋出入のだん(中 静=*仙之助、切 長子=八助)、辻駕のだん(隅の)、あづま与五郎橋本のだん(切 大隅、此所人形出遣いにて御覧に入申候)、八幡引窓のだん(中 角=*助三郎、切 春子)、道行なたねの狂咲(あづま一菅・与五郎一静・長吉一三笠・長五郎一隅の、此所人形出遣いにて御覧に入申候)。 ※角書「濡髪長五郎／放駒長吉」。 ※玉松改メ三代吉田玉造・簗助改メ四(ママ)代吉田文五郎襲名披露。 ※「米屋出入のだん・切」の三味線は『野沢の面影』に拠る。	山崎与五郎(政亀)、けいせいあづま(簗助改メ文五郎)、女房おはや(簗助改メ文五郎)、南与兵衛・南方十次兵衛(玉松改メ玉造)、山崎与次兵衛(兵三)、濡髪辰兵(ママ)郎(東吉)、放駒長吉(玉市)、娘おせき(政亀)、娘おてる(小兵吉)、駕屋甚兵へ(兵吉)、橋本治郎右工門(玉松改メ玉造)、十次兵衛の母(兵三)。
△	1909	明治42	名古屋御園座	(双蝶々曲輪日記)	引窓(古靱=清六)。 引窓(常子)。 ※大阪文楽座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1909	明治42	京都南座	(双蝶々曲輪日記)	引窓(古靱=清六)。 ※大阪文楽一座、越路太夫・南部太夫・鶴尾太夫・常子太夫・古靱太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1909	明治42	名古屋歌舞伎座	(双蝶)	引窓(叶)。 ※鶴沢文治郎門人による「浄瑠璃温習会」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1910	明治43	京都明治座	(双蝶々曲輪日記)	引窓(古靱=清六)。 ※大阪文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1910	明治43	名古屋末広座	(双蝶々)	引窓(叶)。 ※会主野沢吉次「春季浄瑠璃大会」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1910	明治43	名古屋御園座	(双蝶々)	引窓(古靱=清六)。 ※大阪文楽座附竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1910	明治43	京都南座	(双蝶々)	(津=寛次郎)。 引窓(古靱=清六)。 ※文楽一座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1910	明治43	名古屋御園座	(双蝶々)	引窓(古靱=清六)。 ※大阪文楽座、越路太夫・七五三太夫・古靱太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1911	明治44	名古屋御園座	(双蝶々曲輪日記)	引窓(淀)。 ※竹本南部太夫一座。素浄瑠璃。 ※『御園座七十年史』、『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1911	明治44	京都歌舞伎座	(双蝶々曲輪日記)	引窓(古靱=清六)。 ※文楽一座、越路一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1911	明治44	8/2	浪花座	(双蝶々) 引窓(古靱)。 ※文楽座連中による「浄瑠璃大会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	1911	明治44	9/6	京都南座	(双蝶々曲輪日記) 引窓(古靱=清六)。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1911	明治44	9/9	京都岩神座	(双蝶々曲輪日記) 引窓(古靱)。 ※越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
	1911	明治44	9/20~ 10/17	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より橋本の段迄 大序 浮無瀬のだん(越穂、めばゑ、古金、源路、南路=清竜、他四名)、清水坂のだん(南芳、英、文次、路久、喜、富子、須磨=三吉、他三名)、相撲場のだん(口津留/染代/鶴尾/葉=大之助/友之助/助八/玉勝、長五郎-源・長吉-富)、新町揚屋のだん(中越見=広太郎//越喜=兵三//津国=捨三//常子=玉助//むら=勇造、切時=鶴太郎)、米屋内喧嘩のだん(中淀=勝平//綱尾=芳之助//静=兵内//其=広栄//谷=吉助、切津=寛治郎)、難波裏のだん(富=三二)、八幡の里引窓のだん(中古靱=清六、切染=広作)、橋本のだん(中むら=勇造、切撰津大掾=広助)。 ※三味線は『浄瑠璃雑誌』第98号に拠る。尚、同書では「新町揚屋のだん・切」を(むら=勇造、時=鶴太郎)とし、「橋本のだん・中」のむら太夫の出演については「此端場は幽霊で「思ひ無くて藪入したき親里に」より大掾が語る」とある。 ※千種楽は『松竹百年史』に拠る。	山崎与五郎(紋枝)、傾城あづま(三左衛門)、けいせい都後に女房お早(玉七)、与兵衛・南方十次兵衛(多為蔵)、山崎与次兵衛(玉五郎)、濡髪長五郎(栄三)、放駒長吉(玉治郎)、姉おせき(玉五郎)、娘お照(玉吉)、駕甚兵衛(多為蔵)、橋本治部右工門(文三)、長五郎母(三吾)。
△	1911	明治44	12/18	名古屋御園座	(双蝶々曲輪日記) 南与兵衛住家の段(古靱)。 ※越路太夫・南部太夫一行。素浄瑠璃。 ※『御園座七十年史』、『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1913	大正2	2/8	京都南座	(双蝶々曲輪日記) 引窓(錦=竹三郎)。 ※大阪近松座引越し、大隅一派。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1913	大正2	2/25	名古屋末広座	(双蝶々曲輪日記) 引窓(錦=仙市)。 ※大隅太夫・団平、伊達太夫・徳太郎、錦太夫・仙市、ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1913	大正2	7/4	京都京都座	(双蝶々曲輪日記) 引窓(古靱)。 ※大阪文楽座連、越路太夫・吉兵衛。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1913	大正2	11/20	京都明治座	(双蝶々曲輪日記) 引窓(古靱=清六)。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1913	大正2	12/5	東京新富座	(双蝶々曲輪日記) 引窓(古靱=清六)。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1913	大正2	12/10	東京 明治座	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(三笠=団市)。 ※近松座。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	1913	大正2	12/14	名古屋 御園座	(双蝶々) 引窓(古靱=清六)。 ※竹本越路太夫・野沢吉兵衛一行。素浄瑠璃。 ※清六は「ちよつと床へ揚つたきり、病氣とあつて引き下」り、代わりに「政助」が上り「若いに似合はずよく調子を合はせて居たやうだつた」(「名古屋新聞」12月16日評)。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1914	大正3	7/10	京都 南座	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(古靱)。 ※大阪文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1914	大正3	7/18	名古屋 御園座	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(古靱=清六)。 ※竹本越路太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	(不明)
	1915	大正4	6/1~	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より 橋本の段迄 大序 浮無瀬のたん(い、南海、めばゑ、南治、三滝)、清水坂のたん(一日がわり 越穂/喜/小富/鶴尾/津国、路久/文字子/九重/鶴/綱尾)、相撲場のたん(口 綾登、長五郎一呂・長吉一静)、米屋内喧嘩のたん(中 淀、源=*勝市、切 時=*燕四)、難波裏のたん(駒=*三二)、八幡里引窓のたん(中 静=*兵内/ *勝平、切 古靱=*清六)、橋本のたん(中 綱尾、切 津)。 ※「二十五日間」(『義太夫年表 大正篇』)。 ※「母親は番付面に兵吉と有れど同人は病氣にて代りに相違ないが、目立て能く遣ふた所を見ると三吾ならんと思ふ」「(与次兵衛の)代り役何者共知らず」「(橋本のたん・中)綱尾は幽霊」(『浄瑠璃雑誌』第144号)。	山崎与五郎(政亀)、けいせい吾妻(玉七)、けいせい都・女房お早(文五郎)、南与兵へ・南方十次兵へ(玉蔵)、山崎与次兵へ(兵吉)、濡髪長五郎(文三)、放駒長吉(栄三)、姉おせき(玉五郎)、娘おてる(玉五郎)、駕甚兵衛(多為蔵)、治部右衛門(駒十郎)、長五郎の母(兵吉)。
△	1915	大正4	7/2	京都 南座	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(古靱=清六)。 ※大阪文楽座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『松竹百年史』、『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1915	大正4	7/10	浪花座	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(古靱=清六)。 ※「浄瑠璃大会」の内。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』、『義太夫年表 大正篇』欄外記事、『松竹百年史』に拠る。	
△	1915	大正4	7/17	名古屋 御園座	(双蝶々) 引窓(古靱=清六)。 ※越路太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1915	大正4	12/4	名古屋 御園座	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(古靱=清六)。 ※大阪御霊文楽座、竹本越路太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	(不明)
△	1915	大正4	12/17	名古屋 末広座	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(静)。 ※竹本伊達太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	(不明)

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	1915	大正4	12/16	東京 新 富 座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(古靱=清六)。 ※『松竹百年史』に拠る。	
	1916	大正5	4/1~	近 松 座	双蝶々曲輪日 記	辻駕のだん(東=毎日替り 小団/新之助)、橋本の段(弥=八助改メ 吉弥)。 ※浄瑠璃身振り。	
△	1916	大正5	7/2 7/7	京都 南 座	(双蝶々)	引窓の段(古靱=清六)。 橋本(津=友次郎)。 ※大阪文楽座引越、竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1916	大正5	7/9	浪 花 座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(弥)。 ※竹本朝太夫・豊沢松太郎、近松座、錦・弥・角太夫ほか。素浄瑠 璃。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	1916	大正5	8/7	京都 明 治 座	(双蝶々)	引窓(錦)。 ※竹本朝太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1916	大正5	12/1 12/4	東京 歌 舞 伎 座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(古靱=清六)。 (双蝶々) 橋本(津=友治郎)。 ※文楽座、竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『松竹百年史』、『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△	1917	大正6	5/6	名古屋 末 広 座	(双蝶々)	引窓(古靱=清六)。 ※豊竹古靱太夫・鶴沢清六一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1917	大正6	7/8 7/14	京都 南 座	(双蝶々)	引窓の段(八十=吉五郎)。 橋本の段(津=友治郎)。 ※竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
	1917	大正6	9/22~	御霊文楽座	双蝶々曲輪日 記	橋本の段(切 越路=吉兵衛)。 ※「十月十七日打上」(『義太夫年表 大正篇』)。	山崎与五郎(玉松)、けいせゐ吾妻(文五 郎)、山崎与次兵衛(栄三)、娘お照(政 亀)、駕甚兵衛(玉蔵)、治部右衛門(文 三)。
△	1917	大正6	12/3 12/5	東京 歌 舞 伎 座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(八十=一弥)。 (双蝶々) 橋本(津=友次郎)。 ※大阪文楽座浄瑠璃一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△	1917	大正6	12/24	名古屋 御 園 座	(双蝶々)	橋本屋(津=友次郎)。 ※竹本越路太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	(不明)

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1918	大正7	4/19~ 5/21	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記	道行狂乱のだん(町・常子・津花・越登・越名)。 ※角書「あづま／与五郎」。 ※千種楽は『松竹百年史』に拠る。	藤屋あづま(簗助)、山崎与次兵衛(玉八)、 濡髪長五郎(玉徳)、放駒長吉(文之助)。
△	1918	大正7	名古屋 御園座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(八十)。 ※竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1918	大正7	京都 南座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(八十)。	
		8/2		(双蝶々)	橋本(津)。 ※大阪文楽座引越、越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1918	大正7	中座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(古靱=清六)。 ※文楽座、越路太夫一座による「浄瑠璃大会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
	1918	大正7	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より 引窓の段まで	大序 浮無瀬のだん(播路、陸路、南枝、富栄、越名、つばめ、越登、 辰、吉野、小町)、清水坂のだん(毎日替り 津花／谷登／和、三滝／ 越穂／小富)、相撲場のだん(毎日替り 口 常子／源路／鶴、長五 郎一菅・長吉一八十)、米屋内喧嘩のだん(毎日替り 中 英／越代／ 鶴尾、切 駒=*竹三郎)、難波裏のだん(鏝)、橋本のだん(切 弥 =*吉弥)、八幡里引窓のだん(中 駒=*竹三郎、切 津=*友次 郎)。 ※「二十六日間 十月二日打上」(『義太夫年表 大正篇』)。	山崎与五郎(玉八)、傾城あづま(政亀)、女 房お早(文五郎)、南方十治兵衛(栄三)、山 崎与治兵衛(玉五郎)、濡髪長五郎(玉治 郎)、放駒長吉(紋三)、姉お関(玉蔵)、娘 お照(玉七)、駕甚兵衛(文三)、治部右衛門 (玉蔵)、長五郎の母(玉五郎)。
△	1918	大正7	東京 歌舞伎座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(八十)。	
		12/8		(双蝶々)	(津=友治郎)。	
		12/10		(双蝶々曲輪 日記)	引窓(津=友治郎)。 ※大阪文楽座、竹本越路太夫一座。 ※『歌舞伎座百年史』、『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	1919	大正8	京都 南座	(双蝶々)	(津=友治郎)。	
		7/12 7/14		(双蝶々曲輪 日記)	引窓(八十=友之助)。 ※大阪文楽座引越、竹本越路太夫。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1919	大正8	浪花座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(八十=友之助)。 ※文楽座連中による「浄瑠璃大会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	1919	大正8	名古屋 末広座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(八十=友之助)。 ※竹本伊達太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
△	1919	大正8	東京 歌舞伎座	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（八十＝友之助）。		
				（双蝶々）	橋本（津＝友治郎）。 ※大阪文楽座浄瑠璃大一座。素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。		
△	1919	大正8	12/18	名古屋 御園座	（双蝶々曲輪 日記）	引窓の段（八十＝友三郎）。 ※竹本越路太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	（不明）
	1920	大正9	2/1～	京都 竹豊座	双蝶々曲輪日 記 大序より 八幡ノ里 引窓の段まで	大序 浮無瀬のだん（昇、角登、時子、富久、多見、鳴尾、亀、時の、久米）、清水坂のだん（千嶋、松重）、相撲場のだん（千嶋、長五郎一操・長吉一三好）、米屋内喧嘩のだん（南登、明石）、難波裏のだん（円）、橋本のだん（松重、簾＝*弥七）、八幡の里引窓のだん（春次、錦＝*八助）。	山崎与五郎（兵松）、傾城吾妻（扇太郎）、女房お早（扇太郎）、南方十次兵衛（小兵吉）、山崎与次兵衛（兵十郎）、濡髪長五郎（兵十郎）、放駒長吉（新三郎）、姉おせき（扇太郎）、娘おてる（兵次）、駕屋甚兵衛（三郎）、橋本次武右エ門（冠蔵）、長五郎の母（三郎）。
	1920	大正9	6/14～	東京 有楽座	（双蝶々曲輪 日記）	八幡引窓のだん（錦）。	女房おはや（扇太郎）、南方十次兵衛（玉松）、濡髪長五郎（兵十郎）、長五郎の母（三郎）。
△	1920	大正9	7/29	名古屋 御園座	（双蝶々）	橋本（津＝友次郎）。 ※越路一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	（不明）
△	1920	大正9	京都 南座	（双蝶々）	橋本（津＝友次郎）。		
				（双蝶々曲輪 日記）	引窓（八十＝勝平）。 ※大阪文楽座引越、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△	1920	大正9	11/10	東京 有楽座	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（古靱＝清六）。 ※名流演奏会。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	1921	大正10	7/7	京都 南座	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（八十＝歌助）。 ※大阪文楽一座引越し。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1921	大正10	7/24	中座	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（八十＝歌助）。 ※文楽座による「浄瑠璃大会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	1921	大正10	8/2	名古屋 御園座	（双蝶々）	（八十＝歌助）。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	（不明）

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1921	大正10	9/1~	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より 橋本迄	大序 浮無瀬のだん（亀久、呂智、雀、津駒、南枝、清、淀路、陸路、富栄、越登、辰、源福=*清一）、清水坂のだん（越登、文、越名、三滝=*吉一郎）、相撲場のだん（口鏡、越穂、小富=*寛市、長五郎一静・長吉一淀=*燕四/*竹三郎）、新町揚屋のだん（口源路=*吉一郎、中 和泉=*広太郎/*浅造、切 源=*勝市）、米屋内喧嘩のだん（中 島=*吉作、生駒=*友之助、切 弥=*吉弥）、難波裏のだん（一日替り 相生=*芳之助//淀=*団六）、八幡の里引窓のだん（中 八十=*歌助、切 古靱=*清六）、橋本のだん（切 津=*友治郎）。 ※「二十五日間」（『義太夫年表 大正篇』）。	山崎与五郎（玉八）、傾城吾妻（政亀）、傾城都・女房お早（文五郎）、南方与兵衛・十治兵衛（栄三）、山崎与次兵衛（辰五郎）、濡髪長五郎（玉蔵）、放駒長吉（紋三）、姉おせき（玉七）、娘お照（簗助）、駕甚兵衛（文三）、治部右衛門（玉蔵）、長五郎の母（辰五郎）。
△	1922	大正11	浪花座	（双蝶々）	引窓（相生=友之助）。 ※文楽座連中による「浄瑠璃大会」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	1922	大正11	東京新富座	（双蝶々曲輪日記）	引窓（古靱=新左衛門）。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
1923	大正12	6/1~	御霊文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より 引窓まで	大序 浮無瀬のだん（千鳥、津若、駒登、照、雀、南枝、淀路、播路、亀久、呂智、陸路、富栄）、清水坂のだん（辰、源福、越登、文、越名）、相模（ママ）場のだん（口つばめ、鏡、綾、長五郎一静・長吉一和泉）、米屋喧嘩のだん（中 淀、切 源=*勝市）、難波裏のだん（相生）、橋本のだん（切 弥）、道行狂乱のだん（綴・町・源路・三滝）、引窓のだん（中 静=*吉弥、切 古靱=新左衛門）。 ※角書「濡髪長五郎/放駒長吉」。 ※「二十日間」（『義太夫年表 大正篇』）。	山崎与五郎（栄三）、藤屋あづま（文五郎）、傾城みやこ後二おはや（政亀）、南方与兵衛後二十次兵衛（栄三）、山崎与次兵衛（辰五郎）、濡髪長五郎（玉次郎）、放駒長吉（玉松）、姉お関（玉七）、娘お照（簗助）、駕甚兵衛（文三）、治部右衛門（玉蔵）、長五郎の母（辰五郎）。
1924	大正13	11/19~	京都新京極文楽座	双蝶々曲輪日記 大序より 橋本迄	大序 浮無瀬のだん（弥生=新吉、清丸、友吉、六三郎）、相撲場のだん（口 陸路=清丸、長五郎一鏡・長吉一つばめ=八助）、難波裏のだん（鏡=友工門）、引窓のだん（中 つばめ=浅造、切 八十=勝平）、橋本のだん（切 角=吉五郎）。 ※開場1周年記念興行（番付）。	山崎与五郎（玉市）、傾城あづま（文五郎）、傾城都・女房お早（簗助）、南与兵衛・南方十次兵衛（小兵吉）、山崎与次兵衛（冠造）、濡髪長五郎（兵十郎）、放駒長吉（紋太郎）、嫁お照（簗助）、駕の甚兵衛（辰五郎）、治部右衛門（小兵吉）、長五郎母（文五郎）。
1925	大正14	4/15~	京都新京極文楽座	双蝶々曲輪日記	道行狂乱のだん（与五郎一鏡・あづま一越名・長五郎一浜子・長吉一鷹=友之助・友若・吉左・清丸・友吉）。 ※角書「あづま/与五郎」。	けいせゐ吾妻（紋太郎）、山崎与治兵衛（扇太郎）、濡髪長五郎（兵十郎）、放駒長吉（玉市）。
△	1925	大正14	中座	（双蝶々）	引窓（相生=猿太郎）。 ※文楽座連中による「涼み素浄瑠璃」。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△	1926	大正15	京都南座	（双蝶々曲輪日記）	引窓の段（古靱=清六）。 ※文楽座引越し、豊竹古靱太夫・竹本土佐太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1927	昭和2	7/3~4	京都南座	(双蝶々曲輪日記) 引窓の段(貴鳳=芳之助)。 ※大阪文楽座巡業(7月1~23日、近畿・東海)の内。 ※『松竹百年史』、「大阪朝日新聞(京都滋賀版)」(6月30日・7月3日の記事、7月5日の広告)、「京都日出新聞」(7月4日)に拠る。	(不明)
	1927	昭和2	8/29	東京歌舞伎座	双蝶々曲輪日記 橋本の段(貴鳳=猿糸)。 ※大阪文楽座義太夫一座。素浄瑠璃。	
	1927	昭和2	12/21	浪花座	双蝶々 引窓の段(相生=芳之助)。 ※若手素浄瑠璃。	
△	1928	昭和3	1/7	岡山岡山劇場	(双蝶々曲輪日記) 引窓(貴鳳=芳之助)。 ※竹本土佐太夫一行巡業(1月6~24日、山陽・九州)の内。 ※「山陽新報」(1月5・7日の記事、1月5日の広告)に拠る。	
	1928	昭和3	8/19	浪花座	双蝶々曲輪日記 引窓の段(相生=芳之助)。 ※文楽座若手素浄瑠璃。	
	1928	昭和3	10/1~	弁天座	双蝶々曲輪日記 八幡里引窓の段(中 つばめ=勝市//相生=芳之助/友平、切古靱=清六)。 ※10月13日より豊竹つばめ太夫が演習の為召集(『義太夫年表 昭和篇』に拠る)。	女房お早(文五郎)、南方与兵衛(栄三)、濡髪長五郎(玉松)、与兵衛母親(玉七)。
	1928	昭和3	11/7~10	京都南座	双蝶々曲輪日記 八幡の里引窓の段(中 相生=友之助、切古靱=清六)。	女房おはや(文五郎)、南方十次兵衛(栄三)、濡髪長五郎(玉松)、与兵衛の母(玉七)。
	1929	昭和4	7/6~9	東京新橋演舞場	双蝶々曲輪日記 難波裏の段(貴鳳=友之助)、八幡の里引窓の段(中 文字=勝平、切古靱=清六)、橋本の段(切津=友次郎)。	与五郎(扇太郎)、傾城あづま(紋十郎)、女房お早(文五郎)、南与兵衛後に南方十次兵衛(栄三)、親与次兵衛(玉次郎)、濡髪長五郎(玉幸)、放駒長吉(玉市)、嫁おてる(紋太郎)、駕かき甚兵衛(栄三)、橋本小右衛門(玉松)、与五郎の母(玉七)。
△	1929	昭和4	9/16~17	神戸八千代座	(双蝶々曲輪日記) 引窓(中 つばめ=勝市、切古靱=清六)。 ※「神戸新聞」(9月11~15・17~18日、9月13~19日の広告)に拠る。	お早(紋十郎)、南方(栄三)、長五郎(玉松)、母親(玉七)。
△	1929	昭和4	9/22	高松聚楽座	双蝶々曲輪日記 八幡の里引窓の段(古靱=清六)。 ※文楽座巡業(9月7~23日、名古屋・神戸・高松)の内。 ※「香川新報」(9月19~23日、9月20~21・23日の広告)に拠る。	(不明)
△	1929	昭和4	10/10~27	地方公演(山陽・九州)	(双蝶々曲輪日記) 八幡の里引窓の段(中 つばめ=勝市、切古靱=清六)。 ※大阪文楽座巡業。10月10日広島・寿座、10月19日熊本・東雲座での公演を含む。 ※「中国新聞」(10月7・11日、10月9日の広告)、「大阪毎日新聞西部毎日(熊本版)」(10月17日)に拠る。	
	1930	昭和5	1/1~2/3	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日記 橋本の段(切津=友次郎)。 ※四ツ橋文楽座竣工記念。 ※千種楽は『松竹百年史』に拠る。	山崎与五郎(紋太郎)、傾城あづま(文五郎)、山崎与次兵衛(玉治郎)、嫁おてる(扇太郎)、駕の甚兵衛(栄三)、橋本治部右衛門(玉松)。
	1930	昭和5	8/16	東京	双蝶々曲輪日記 引窓の段(相生=猿糸)。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
		8/24	東京劇場	記	引窓の段（文字＝勝平）。 ※素浄瑠璃。	
△	1930	昭和5	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（中 和泉／貴鳳＝団六／芳之助、切 古靱＝清六）。	女房お早（文五郎）、南方十次兵衛（栄三）、濡髪長五郎（玉松）、与兵衛母親（小兵吉）。
△	1930	昭和5	京都華頂会館	（双蝶々曲輪日記）	引窓。 ※京都仏教護国団主催。 ※「大阪朝日新聞（京都版）」（11月25日）に拠る。	
△	1931	昭和6	竹本土佐太夫宅	（双蝶々）	橋本（千駒＝友二）。 ※大序会。 ※『浄瑠璃雑誌』第300号に拠る。	
△	1931	昭和6	東京明治座	双蝶々曲輪日記	八幡の里引窓の段（相生＝芳之助）。	女房お早（扇太郎）、南方十次兵衛（政亀）、濡髪長五郎（玉幸）、与兵衛の母（小兵吉）。
△	1931	昭和6	地方公演（九州・山陽・四国）	（双蝶々曲輪日記）	八幡の里引窓の段（相生＝清二郎）。 ※竹本土佐太夫一行巡業。10月8日広島・寿座、10月12日松山・国伎座、10月16日徳島・稲荷座での上演を含む。 ※「中国新聞」（10月2・9～10日、10月2・6・8日の広告）、「海南新聞」（10月8・13日）、「大阪朝日新聞（徳島版）」（10月13日）、「徳島毎日新聞」（10月15～17日）、『浄瑠璃雑誌』第306号に拠る。	
△	1932	昭和7	名古屋御園座	（双蝶々）	引窓（文字＝勝平）。 ※竹本鏝太夫一行巡業（5月4～14日、東海）の内。文楽座の若手による素浄瑠璃興行。 ※「新愛知」（5月1・3～8日）、『浄瑠璃雑誌』第312号に拠る。	
△	1932	昭和7	東京東京劇場	双蝶々曲輪日記	引窓の段（古靱＝清六）。 ※素浄瑠璃。	
△	1932	昭和7	広島寿座	（双蝶々曲輪日記）	引窓（相生＝清二郎）。 ※大阪文楽座若手連巡業（12月1日～、広島・九州）の内。 ※「中国新聞」（11月27日の記事、11月23・30日の広告）、『浄瑠璃雑誌』第318号に拠る。	
△	1932	昭和7	四ツ橋文楽座	（双蝶々曲輪日記）	引窓（貴鳳＝友造）。 ※英彦山国立公演運動寄附公演。 ※『浄瑠璃雑誌』第319号に拠る。	
△	1933	昭和8	高知堀詰座	（双蝶々）	引窓（土佐美＝仁平）。 ※竹本土佐太夫一行巡業。 ※『浄瑠璃雑誌』第325号に拠る。 ※『文楽興行記録昭和篇』は三味線を野沢勝鳳とする。	
	1933	昭和8	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日記	【9～11日】八幡の里引窓の段（富＝喜代之助、相生＝清二郎）。 【12～14日】八幡の里引窓の段（文＝叶太郎、つばめ＝芳之助）。 【15～17日】八幡の里引窓の段（辰＝稲丸、貴鳳＝友二）。 【18～20日】八幡の里引窓の段（千駒＝八造、和泉＝友造）。 ※第2回文楽若手特別興行。	女房お早（文五郎）、南方十次兵衛（栄三）、濡髪長五郎（玉松）、長五郎母（小兵吉）。

	西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1933	昭和8	11/25	京都 六角会館	(双蝶々)	引窓の段(文字=勝平)。 ※京都婦人慈善教会主催慈善文楽会。 ※「大阪朝日新聞(京都版)」(11月24日)に拠る。	
△	1934	昭和9	5/30	(不明)	(双蝶々曲輪 日記)	八幡引窓の段。 ※竹本三蝶会。女流人形浄瑠璃の夕。文楽座人形陣が出演。 ※『浄瑠璃雑誌』第334号に拠る。	お早(光之助)、与兵衛(玉次郎)、長五郎 (玉市)、母親(玉七)。
	1934	昭和9	7/27~29	東京 歌舞伎座	双蝶々曲輪日 記	橋本の段(切津=綱造)。	山崎与五郎(文作)、傾城あづま(文五郎)、 山崎与次兵衛(玉次郎)、娘おてる(光之 助)、駕の甚兵衛(栄三)、橋本十右衛門(門 造)。
	1934	昭和9	8/9~10	東京 明治座	双蝶々曲輪日 記	八幡の里引窓の段(相生=重造)。	女房おはや(政亀)、南方十次兵衛(栄三)、 濡髪長五郎(玉松)、母親(小兵吉)。
	1935	昭和10	1/16~	戎座 〈竹本座〉	双蝶々曲輪日 記	引窓の段(口大庫=竜二郎、切錦=竜助)。	おはや(半八)、南方十次兵衛(義三郎)、濡 髪長五郎(茂明)、長五郎の母(義孝)。
△	1935	昭和10	8/23	浪花座	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(相生=重造)。 ※文楽若手浄瑠璃会納涼浄瑠璃。 ※「大阪毎日新聞」(8月21日の広告)、『浄瑠璃雑誌』第342号に拠 る。	
△	1936	昭和11	2/15	和歌山 和歌山公会堂 〈新義座〉	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(小松=勝芳)。 ※大阪新義座一行巡業(2月1~16日、東海・近畿)の内。 ※『浄瑠璃雑誌』第346号に拠る。	
	1936	昭和11	2/16~18	京都 南座	双蝶々曲輪日 記	八幡里引窓の段(中和泉=寛市、切古靱=重造)。	女房お早(文五郎)、南方十次兵衛(栄三)、 濡髪長五郎(玉幸)、与兵衛の母(小兵吉)。
	1937	昭和12	1/1~20	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日 記	橋本の段(切津=綱造)。 ※千種楽は『浄瑠璃時報』第175号に拠る。 ※1月6日「橋本の段」ラジオ中継放送(「大阪朝日新聞」「東京朝日 新聞」1月6日の記事に拠る)。 ※『浄瑠璃雑誌』第356号に拠る左遣い・足遣いの人形小割は次の通 り。嫁おてるの左は吉田小兵吉、足は桐竹紋昇、甚兵衛の左は桐竹門 造、足は吉田玉男、与五郎の左は吉田利男、足は吉田玉徳、あづまの 左は桐竹政亀、足は吉田文枝、治部右衛門の左は吉田玉幸、足は吉田 玉丸、与次兵衛の左は吉田玉市、足は吉田玉枝、与五郎の左は吉田玉 徳、足は吉田利男、おてるの左は吉田瓢寿呂、足は桐竹紋昇。	山崎与五郎(紋太郎)、傾城あづま(文五 郎)、山崎与次兵衛(玉次郎)、嫁おてる(光 之助)、駕甚兵衛(栄三)、橋本治部右衛門 (玉蔵)。
△	1937	昭和12	3/1~5	東京 小石川倶楽部	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(梅本香伯=猿蔵)。 ※梅本香伯は二代鶴沢観西翁。 ※第1回日本帝都因会奨励会。5日間演題毎日順廻り。 ※『浄瑠璃時報』第177・178号には、「引窓」の代わりに「八陣」と ある。 ※『浄瑠璃雑誌』第362号に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1937	昭和12	4/19	名古屋 中座 〈新義座〉	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(小松=勝之介)。 ※大阪新義座巡業(4月4~28日、東海・関東)の内。乙女人形入。 ※『文楽興行記録昭和篇』書入れ、「名古屋新聞」(4月18・20日)に 拠る。	
△	1937	昭和12	9/13~14	名古屋 御園座	(双蝶々曲輪 日記) 橋本の段(津=綱造)。 ※大阪文楽座巡業(9月11~19日、東海)の内。 ※『浄瑠璃時報』第191号、『御園座七十年史』、「新愛知」(9月1~ 5・8~12・14・16日、9月4・8~16日の広告)に拠る。	(不明)
	1938	昭和13	9/20~22	東京 明治座	双蝶々曲輪日 記 相撲場より 八幡里引窓の 段 相撲場の段(口 辰=一郎右衛門、濡髪長五郎一呂・放駒長吉一相生= 吉左)、八幡里引窓の段(中 和泉=寛治郎、切 大隅=広助)。 ※角書「濡髪長五郎/放駒長吉」。	山崎与五郎(文作)、女房お早(文五郎)、南 方十次兵衛(栄三)、山崎与次兵衛(玉次 郎)、濡髪長五郎(玉蔵)、放駒長吉(玉 幸)、長五郎の母(政亀)。
	1939	昭和14	7/8~17	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日 記 引窓の段(切 大隅=広助)、橋本の段(切 駒=清二郎)。 ※千種楽は『道頓堀』第152号に拠る。	山崎与五郎(文之助)、傾城あづま(文五 郎)、女房お早(小兵吉)、南方十次兵衛(玉 蔵)、山崎与次兵衛(玉次郎)、濡髪長五郎 (玉幸)、嫁おてる(紋太郎)、駕甚兵衛(栄 三)、橋本十右衛門(門造)、与兵衛の母(政 亀)。
△	1939	昭和14	9/9~10	神戸 松竹劇場	(双蝶々曲輪 日記) 橋本の段(津)。 ※文楽座巡業(9月9日~、神戸・鳥取・博多・他)の内。 ※「神戸新聞」(9月8・10・12~13日の記事、9月7・10日の広告)、 『浄瑠璃雑誌』第382号に拠る。	(不明)
	1940	昭和15	6/1~	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日 記 相撲場より 橋本の段まで 相撲場の段(口 長尾=叶太郎//富=団伊三、濡髪長五郎一大隅・放駒 長吉一文字=広助)、八幡里引窓の段(中 和泉/伊勢=叶、切 古鞆 =清六)、橋本の段(切 津=友次郎)。 ※角書「濡髪長五郎/放駒長吉」。	山崎与五郎(文作)、傾城あづま(文五郎)、 女房お早(文五郎)、南方十次兵衛(栄三)、 山崎与次兵衛(小兵吉)、濡髪長五郎(玉 蔵)、放駒長吉(玉幸)、嫁お照(光之助)、 駕甚兵衛(栄三)、橋本十右衛門(玉蔵)、 長五郎の母(政亀)。
△	1940	昭和15	9/26カ	東京 新橋演舞場	(双蝶々曲輪 日記) 引窓(古鞆=清六)。 ※素浄瑠璃。 ※「朝日新聞(東京版)」(9月20~22・25~27日の広告)、「報知新 聞」(9月20~27日の広告)、「東京日日新聞」(9月25日の記事、9月 22日の広告)、『太棹』第118号、『浄瑠璃雑誌』第394・395号に拠 る。	
	1941	昭和16	7/26~28	東京 新橋演舞場	双蝶々曲輪日 記 八幡里引窓の段(中 相生=吉五郎//織=団六、切 古鞆=清六)。	女房お早(文五郎)、南方十次兵衛(栄三)、 濡髪長五郎(玉蔵)、十次兵衛の母(小兵 吉)。
	1941	昭和16	8/7~8	京都 南座	双蝶々曲輪日 記 八幡里引窓の段(中 和泉=叶、切 古鞆=清六)。	女房お早(文五郎)、与兵衛後に南方十次兵衛 (栄三)、濡髪長五郎(玉蔵)、与兵衛の母 (小兵吉)。

	西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1941	昭和16	8/13~14	名古屋御園座	(双蝶々曲輪日記)	引窓。 ※『御園座七十年史』、「新愛知」(8月2・6・12日、8月5・11・13日の広告)に拠る。	(不明)
	1941	昭和16	9/1~23	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段(中 和泉=叶//呂=仙糸、切 古靱=清六)。 ※千穂楽は『松竹百年史』に拠る。 ※9月8日「引窓の段」ラジオ中継放送(古靱=清六)。「朝日新聞(大阪版)」「朝日新聞(東京版)」9月8日の記事、『太棹』第103号に拠る。	女房お早(文五郎)、南方十次兵衛(栄三)、濡髪長五郎(玉幸)、与兵衛母(小兵吉)。
△	1943	昭和18	4/27	ラジオ放送	(双蝶々曲輪日記)	引窓の段(大隅=清二郎、他)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「朝日新聞(東京版)」(4月27日)に拠る。	
	1943	昭和18	7/21~25	東京新橋演舞場	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段(中 七五三=綱造、切 古靱=清六)。	女房お早(文五郎)、南方十次兵衛(栄三)、濡髪長五郎(門造)、十次兵衛の母(小兵吉)。
△	1943	昭和18	10/24	東京浅草並木倶楽部	(双蝶々曲輪日記)	引窓(路=絃平)。 ※日本義太夫因会男子部秋季大会。 ※『太棹』第149号、『浄瑠璃月報』第79号に拠る。	
	1944	昭和19	2/1~	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段(切 住=重造//相生=吉五郎)。	お早(栄三郎)、南方十次兵衛(亀松/光造)、濡髪長五郎(門造)、与兵衛の母(小兵吉)。
	1944	昭和19	9/1~	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段(中 住=重造//呂=友衛門、切 古靱=清六)。	女房お早(文五郎)、南方十次兵衛(栄三)、濡髪長五郎(玉市)、与兵衛の母(小兵吉)。
	1945	昭和20	12/4~9	朝日会館	双蝶々曲輪日記	引窓の段(切 古靱=清六)。	女房お早(文五郎)、南方十次兵衛(玉助)、濡髪長五郎(門造)、長五郎母(紋太郎)。
	1946	昭和21	3/31~4/14	京都南座	双蝶々曲輪日記	引窓の段(切 大隅=清八)。	女房お早(亀松)、南方十字兵衛(玉助)、濡髪長五郎(玉市)、長五郎母(門造)。
	1946	昭和21	9/1~23	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日記	引窓の段(切 大隅)。	お早(亀松)、十次兵衛(玉助)、長五郎(玉市)、母親(紋太郎)。
△	1946	昭和21	12/12	ラジオ放送	(双蝶々曲輪日記)	引窓(相生=吉五郎)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」(12月12日)に拠る。	
	1947	昭和22	2/1~20	四ツ橋文楽座	双蝶々曲輪日記	橋本の段(前 住=重造//呂=友衛門、後 大隅=清八)。 ※千穂楽は『松竹百年史』に拠る。	山崎与五郎(紋昇)、傾城あづま(光造)、山崎与次兵衛(玉市)、嫁おてる(紋司)、駕甚兵衛(玉助)、橋本治武衛門(玉徳)。
△	1947	昭和22	8/5	ラジオ放送	(双蝶々曲輪日記)	(住)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」(8月5日)に拠る。	
	1947	昭和22	9/26~10/1	東京東京劇場	双蝶々曲輪日記	八幡里の段(中 浜=吉五郎)、引窓の段(切 古靱改め 山城少掾=清六)。	女房お早(文五郎)、南方十次兵衛(玉助)、濡髪長五郎(門造)、与兵衛の母(紋太郎)。
△	1948	昭和23	6/12	ラジオ放送	(双蝶々)	(相生)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「読売新聞」(6月12日)に拠る。	

	西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△	1949	昭和24	6/1	ラジオ放送 〈組合〉	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(住)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪)」(6月1日)に拠る。	
△	1949	昭和24	9/29	ラジオ放送 〈因会〉	(双蝶々曲輪 日記)	橋本(大隅)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」(9月29日)に拠る。	
	1950	昭和25	2/15~18	名古屋 御園座 〈因会〉	双蝶々曲輪日 記	引窓の段(切 大隅=清八)。	女房おはや(玉男)、南方十次兵衛(亀松)、 濡髪長五郎(玉市)、十次兵衛の母(兵次)。
	1950	昭和25	3/4~8	東京 新橋演舞場 〈因会〉	双蝶々曲輪日 記	八幡里引窓の段(切 大隅=清八)。	女房お早(玉男)、南方十次兵衛(玉助)、濡 髪長五郎(亀松)、与兵衛の母(兵次)。
△	1950	昭和25	8/30	ラジオ放送 〈因会〉	(双蝶々曲輪 日記)	引窓の段(相生)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」(8月30日)に拠る。	
	1951	昭和26	5/17~31	四ツ橋文楽座 〈因会〉	双蝶々曲輪日 記	八幡里引窓の段(中 津=寛治郎、切 山城少掾=弥七)。 ※千種楽は『松竹百年史』に拠る。 ※5月20日より豊竹山城少掾休演のため、竹本相生太夫が代演(「毎日 新聞(大阪版)」5月31日の記事、『幕間』第6巻第6号(昭和26年6 月)、『文楽因会三和会興行記録』に拠る)。	女房お早(文五郎)、南与兵衛後に南方十次兵 衛(玉助)、濡髪長五郎(亀松)、与兵衛の母 (辰造)。
△	1952	昭和27	10/22	ラジオ放送 〈因会〉	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(相生=松之輔)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「読売新聞」(10月22日)に拠る。	
△	1952	昭和27	10/25	三越劇場 〈因会〉	(双蝶々曲輪 日記)	引窓(山城少掾=藤蔵)。 ※三越名人会。 ※『文楽興行記録昭和篇』に拠る。	
	1952	昭和27	12/8~12	東京 新橋演舞場 〈因会〉	双蝶々曲輪日 記	八幡里引窓の段(中 河内=吉三郎、切 山城少掾=藤蔵)。	女房お早(文五郎)、南与兵衛後に南方十次兵 衛(玉助)、濡髪長五郎(玉男)、与兵衛の母 (紋太郎)。
△	1953	昭和28	3/11	ラジオ放送 〈三和会〉	(双蝶々曲輪 日記)	(住=勝太郎)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」(3月11日)に拠る。	
△	1953	昭和28	3/22	ラジオ放送 〈因会〉	(双蝶々曲輪 日記)	引窓の段(山城少掾=藤蔵)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」(3月22日)に拠る。	
	1953	昭和28	6/2~7	東京 三越劇場 〈三和会〉	双蝶々曲輪日 記	八幡引窓の段(前 つばめ=市治郎、後 住=勝太郎)。	女房お早(勘十郎)、南方十次兵衛(紋十 郎)、濡髪長五郎(辰五郎)、母お幸(国 秀)。
	1953	昭和28	9/2~6	京都 宮川町歌舞練 場 〈三和会〉	双蝶々曲輪日 記	八幡引窓の段(切 住=勝太郎)。	女房お早(紋之助)、南方十次兵衛(紋十 郎)、濡髪長五郎(勘十郎)、母(国秀)。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1953	昭和28	9/16~20	神戸 仏教会館 〈三和会〉	双蝶々曲輪日記	引窓の段（切 住＝勝太郎）。	お早（紋之助）、十次兵衛（紋十郎）、長五郎（勘十郎）、母親（国秀）。
1953	昭和28	10/3~25	四ツ橋文楽座 〈因会〉	双蝶々曲輪日記 通し狂言	相撲場の段（口 十九＝新三郎、長五郎一河内・長吉一織の＝清八）、大宝寺町米屋の段（口 弘＝寛弘、中 宮＝清友／錦糸、切 相生＝松之輔）、難波裏喧嘩の段（長子＝八造）、八幡里引窓の段（中 静＝豊助、後 津＝寛治郎）、橋本の段（切 綱＝弥七）。 ※角書「濡髪長五郎／放駒長吉」。 ※豊竹宮太夫休演のため、「大宝寺町米屋の段・中」を竹本織の太夫が代演（『織大夫夜話 文楽へのいざない』に拠る）。	山崎与五郎（玉男）、傾城吾妻（亀松）、女房お早（玉五郎）、南方十次兵衛（玉助）、山崎与次兵衛（紋太郎）、濡髪長五郎（玉市）、放駒長吉（栄三）、姉おせき（玉五郎）、嫁おてる（文雀）、駕甚兵衛（玉助）、橋本次部右衛門（玉市）、長五郎の母（兵次）。
				道行菜種の乱 咲	狂乱の段（南部・宮・織部・相次・多満＝吉三郎・友十郎・清友／錦糸・清好・藤之助・喜八郎）。 ※角書「あづま／与五郎」。 ※西亭＝作曲、榎茂都陸平＝振付、大塚克三＝装置。 ※千穂楽は「毎日新聞（大阪版）」（10月24日）に拠る。	山崎与五郎（玉男）、傾城吾妻（亀松）。
△	1953	昭和28	ラジオ放送 〈因会〉	（双蝶々曲輪 日記）	相撲場の段（十九＝新三郎）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」（10月28日）に拠る。	
△	1953	昭和28	ラジオ放送 〈因会〉	（双蝶々曲輪 日記）	八幡の里引窓の段（相生＝松之輔）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」（12月13日）に拠る。	
△	1954	昭和29	ラジオ放送 〈三和会〉	（双蝶々曲輪 日記）	（つばめ、他）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」（2月3日）に拠る。	
	1954	昭和29	東京 三越劇場 〈三和会〉	双蝶々曲輪日記	八幡引窓の段（つばめ＝喜左衛門）。	女房お早（紋之助）、南与兵衛実は南方十次兵衛（辰五郎）、濡髪長五郎（勘十郎）、母親（国秀）。
	1954	昭和29	四ツ橋文楽座 〈因会〉	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（中 長子＝錦糸、切 山城少掾＝藤蔵）。	女房お早（玉五郎）、南与兵衛（栄三）、濡髪長五郎（玉市）、与兵衛の母（紋太郎）。
△	1955	昭和30	ラジオ放送 〈三和会〉	（双蝶々曲輪 日記）	（住）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」（1月27日）に拠る。	
	1955	昭和30	東京 歌舞伎座 〈両派〉	双蝶々曲輪日記	橋本の段（古住、住＝勝太郎）。 ※国家指定芸能特別鑑賞会。 ※4月17日ラジオ放送（「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（4月17日）に拠る）。	
	1955	昭和30	名古屋 御園座 〈因会〉	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（相生＝松之輔）。	女房おはや（玉五郎）、南方十次兵衛（玉助）、濡髪長五郎（亀松）、十次兵衛の母（常次）。
△	1955	昭和30	ラジオ放送 〈三和会〉	（双蝶々曲輪 日記）	引窓の段（住＝勝太郎）。 ※「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」「週刊NHK新聞」（10月9日）に拠る。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
1956	昭和31	4/24	石川 山中温泉温泉 会館 〈因会〉	双蝶々曲輪日 記	橋本の段（雛＝広助）。 ※豊沢仙八披露浄瑠璃大会。	（不明）	
△	1956	昭和31	6/29～30	中之島中央公 会堂 〈合同〉	双蝶々曲輪日 記	引窓の段（前 古住＝燕三、後 つばめ＝喜左衛門）。 ※浄瑠璃神社（生玉魂神社内）復興資金募集文楽共同公演。 ※野沢喜左衛門休演のため、「引窓の段・後」を野沢勝太郎が代演。	女房お早（紋之助）、南方十次兵衛（紋十郎）、濡髪長五郎（勘十郎）、母（国秀）。
△	1956	昭和31	9/29	ラジオ放送 〈因会〉	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（相生＝松之輔）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（9月29日）に拠る。	
△	1957	昭和32	5/27	神戸 神戸国際会館 〈合同〉	双蝶々曲輪日 記	橋本の段（住＝喜左衛門）。 ※国家指定芸能特別鑑賞会。	
△	1957	昭和32	9/28	ラジオ放送 〈因会〉	（双蝶々曲輪 日記）	引窓の段（相生＝松之輔）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（9月28日）に拠る。	
	1957	昭和32	11/30～ 12/1	東京 新橋演舞場 〈合同〉	双蝶々曲輪日 記	相撲場の段（長五郎一津・長吉一つばめ＝寛治）、橋本の段（住＝喜左衛門）、引窓の段（綱＝弥七//若＝勝太郎）。 ※芸術祭第4回文楽合同公演。 ※12月6日「橋本の段」「引窓の段」ラジオ放送（「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（12月6日）に拠る）。	与五郎（東太郎）、吾妻（紋之助）、お早（紋十郎）、南方十次兵衛（栄三）、与次兵衛（国秀）、長五郎（勘十郎）、長吉（玉男）、お照（文雀）、甚兵衛（玉助）、十右衛門（玉市）、母親（玉市）。
	1957	昭和32	12/24～25	道頓堀文楽座 〈因会〉	双蝶々曲輪日 記	引窓の段（前 伊達路＝弥七、後 織の＝藤蔵）。 ※第8回文楽座因会若手勉強会。	女房お早（文昇）、南方十次兵衛（玉昇）、濡髪長五郎（東太郎）、母親（淳造）。
	1958	昭和33	9/1～11	道頓堀文楽座 〈合同〉	双蝶々曲輪日 記	橋本の段（駕の甚兵衛一住・橋本次部右衛門一若・あづま一土佐・与五郎一古住・お照一南部・下女お松一静・駕の太助一十九・親与次兵衛一綱＝勝太郎）、八幡里引窓の段（前 相生＝松之輔、切 山城少掾＝藤蔵）。 ※角書「濡髪長五郎／放駒長吉」。 ※六代竹本住大夫引退披露。	与五郎（玉男）、傾城あづま（紋十郎）、女房お早（前＝文五郎事 難波掾、後＝玉五郎）、南方十次兵衛（栄三）、与次兵衛（玉市）、濡髪長五郎（勘十郎）、お照（紋之助）、駕の甚兵衛（玉助）、治部右衛門（辰五郎）、母親（玉市）。
△	1958	昭和33	12/5	ラジオ放送 〈因会〉	（双蝶々曲輪 日記）	引窓（山城少掾カ）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（12月5日）に拠る。	
	1959	昭和34	2/8～12	東京 新橋演舞場 〈合同〉	双蝶々曲輪日 記	八幡里引窓の段（中 津＝寛治//つばめ＝喜左衛門、後 つばめ＝喜左衛門//津＝寛治）。	女房お早（玉五郎）、南方十次兵衛（栄三）、濡髪長五郎（勘十郎）、母親（国秀）。
	1959	昭和34	6/10～12	名古屋 御園座 〈合同〉	双蝶々曲輪日 記	八幡里引窓の段（前 津＝寛治、後 つばめ＝喜左衛門）。	女房お早（玉五郎）、南方十次兵衛（栄三）、濡髪長五郎（勘十郎）、長五郎の母（辰五郎）。
	1959	昭和34	8/6～9	京都 南座 〈合同〉	双蝶々曲輪日 記	引窓の段（綱＝弥七）。	女房お早（玉五郎）、南方十次兵衛（亀松）、濡髪長五郎（勘十郎）、長五郎の母（国秀）。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
	1960	昭和35	4/1~16	地方公演 (山陽・九州) 〈三和会〉	双蝶々曲輪日記 八幡村引窓の段(前 文字=市治郎、後 つばめ=喜左衛門)。 ※12日より一段通して(つばめ=喜左衛門)。	嫁お早(紋之助改め 清十郎)、南方十次兵衛(紋十郎)、濡髪長五郎(勘十郎)、母親(国秀)。
△	1960	昭和35	8/5	ラジオ放送 〈三和会〉	(双蝶々曲輪日記) 道行菜種の乱咲(つばめ・文字・小松=喜左衛門)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(8月5日)に拠る。	
△	1960	昭和35	9/1	ラジオ放送 〈因会〉	(双蝶々曲輪日記) 引窓の段(綱=弥七)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(9月1日)に拠る。	
	1961	昭和36	7/27	東京歌舞伎座 〈因会〉	双蝶々曲輪日記 八幡の里引窓の段(織=徳太郎)。 ※文楽座大夫三味線名曲鑑賞会。 ※竹本綱太夫・竹沢弥七の出演が予定されていたが、竹本綱太夫休演のため竹本織の太夫・鶴沢徳太郎が出演(「読売新聞(東京版)」(7月13日)に拠る)。	
	1961	昭和36	8/23~27	道頓堀文楽座 〈因会〉	双蝶々曲輪日記 二場 相撲場の段(濡髪長五郎一津・放駒長吉一南部=吉三郎)、橋本の段(切 相生=重造)。	倅与五郎(文昇)、傾城あづま(栄三)、山崎与次兵衛(玉市)、濡髪長五郎(東太郎)、放駒長吉(玉昇)、娘おてる(文雀)、駕の甚兵衛(玉助)、橋本次部右衛門(玉男)。
△	1961	昭和36	9/14	ラジオ放送 〈三和会〉	(双蝶々曲輪日記) 引窓の段(つばめ)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(9月14日)に拠る。	
	1962	昭和37	4/18~23	道頓堀文楽座 〈因会〉	双蝶々曲輪日記 八幡里引窓の段(中 織の=吉三郎、切 津=寛治)。 ※吉田玉五郎初日休演(『吉田文雀ノート』に拠る)。	女房お早(玉五郎)、南方十次兵衛(玉助)、濡髪長五郎(東太郎)、十次兵衛の母(常次)。
	1963	昭和38	2/22~3/9	地方公演 (東京) 〈三和会〉	双蝶々曲輪日記 八幡里引窓の段(つばめ=喜左衛門、若=勝太郎)。	女房お早(清十郎)、南方十次兵衛(辰五郎)、濡髪長五郎(勘十郎)、母(国秀)。
	1963	昭和38	9/28~29	名古屋愛知文化講堂	双蝶々曲輪日記 八幡里引窓の段(相生=重造)。 ※財団法人文楽協会誕生記念。	女房お早(簗助)、南方十次兵衛(玉助)、濡髪長五郎(玉男)、与兵衛の母(玉市)。
△	1963	昭和38	10/1	ラジオ放送	(双蝶々曲輪日記) 引窓の段(文字=勝太郎)。 ※「朝日新聞(大阪版)」「毎日新聞(大阪版)」「読売新聞(大阪版)」(10月1日)に拠る。	
	1964	昭和39	10/31~11/18	朝日座	双蝶々曲輪日記 相撲場の段(長五郎一文字・長吉一綱子=吉兵衛)。 ※吉田玉昇11月8~12日休演のため、濡髪長五郎を吉田文雀が代演(『吉田文雀ノート』、「文楽友の会通信」第8号に拠る)。	濡髪長五郎(玉昇)、放駒長吉(紋弥)。
	1966	昭和41	7/22~31	朝日座	双蝶々曲輪日記 引窓の段(中 十九=徳太郎、切 相生=重造)。 ※竹本相生大夫叙勲記念。	女房おはや(玉五郎)、南方十次兵衛(栄三)、濡髪長五郎(勘十郎)、十次兵衛母(国秀)。
	1966	昭和41	11/28	東京早稲田大学演劇博物館	双蝶々曲輪日記 引窓の段(相生=重造)。 ※義太夫鑑賞会。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
1967	昭和42	9/17~ 10/1	東京 国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記 通し狂言	堀江角力場の段（長五郎一織ノ文字・長吉一咲＝徳太郎）、大宝寺町米屋の段（中 相子＝勝平、文字ノ織＝燕三）、難波裏喧嘩の段（大隅＝叶太郎）、八幡里引窓の段（十九＝錦糸、越路＝喜左衛門）、橋本の段（津＝寛治）。	山崎与五郎（簗助）、藤屋吾妻（亀松）、女房お早（清十郎）、南方十次兵衛（栄三）、山崎与次兵衛（玉五郎）、濡髪長五郎（勘十郎）、放駒長吉（玉昇）、姉お関（玉五郎）、嫁お照（文昇）、駕籠の甚兵衛（辰五郎）、橋本治部右衛門（玉男）、長五郎母（国秀）。	
△	1967	昭和42	10/3	栃木県足利市 月見ヶ丘体育館	（双蝶々曲輪日記）	引窓の段（文字＝団六）。 ※文楽協会資料に拠る。	女房おはや（清十郎）、南方十次兵衛（栄三）、濡髪長五郎（勘十郎）、十次兵衛母（国秀）。
	1967	昭和42	11/25~26	名古屋 中日劇場	双蝶々曲輪日記	引窓の段（十九＝錦糸、越路＝喜左衛門）。	女房おはや（清十郎）、南方十次兵衛（栄三）、濡髪長五郎（勘十郎）、十次兵衛母（国秀）。
△	1969	昭和44	12/21	ラジオ放送	（双蝶々曲輪日記）	橋本の段（津）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（12月21日）に拠る。	
△	1970	昭和45	9/21	ラジオ放送	（双蝶々曲輪日記）	引窓の段（相生＝重造）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（9月21日）に拠る。	
△	1971	昭和46	9/20	ラジオ放送	（双蝶々曲輪日記）	（越路＝喜左衛門）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（9月20日）に拠る。	
△	1972	昭和47	10/23	大阪御堂会館	（双蝶々曲輪日記）	引窓の段（相生＝重造）。 ※素浄瑠璃の会。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」（10月21日）、 「サンケイ新聞（大阪版）」（6月29日）に拠る。	
△	1972	昭和47	11/21	東京 第一生命ホール	（双蝶々曲輪日記）	引窓の段（相生＝重造）。 ※素浄瑠璃の会。 ※「毎日新聞（大阪版）」（10月21日）に拠る。	
△	1973	昭和48	3/20	ラジオ放送	（双蝶々曲輪日記）	※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（3月20日）に拠る。	
△	1973	昭和48	5/9	ラジオ放送	（双蝶々曲輪日記）	引窓の段（後半 相生＝重造）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（5月9日）に拠る。	
	1973	昭和48	7/15~29	朝 日 座	双蝶々曲輪日記	引窓の段（小松＝道八、越路＝喜左衛門）。 ※「三世竹本津大夫三十三回忌追善、大近松二百五十年忌に因んで」（筋書）。	女房おはや（簗助）、南方十次兵衛（勘十郎）、濡髪長五郎（玉昇）、十次兵衛母（国秀）。
	1973	昭和48	10/26~28	京都 京都府立文化 芸術会館	双蝶々曲輪日記	引窓の段（相生＝錦糸、越路＝喜左衛門）。 ※近松門左衛門二百五十年祭記念。	女房おはや（文雀）、十次兵衛母（玉五郎）、濡髪長五郎（玉昇）、南方十次兵衛（勘十郎）。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△ 1975	昭和50	2/9	ラジオ放送	双蝶々曲輪日記	橋本（津＝勝太郎）。 ※「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（2月9日）、「今尾哲也氏義太夫節関係カセットテープ一覧」（『近松研究所紀要』第13号）に拠る。	
1975	昭和50	11/14～16	京都 京都府立文化 芸術会館	双蝶々曲輪日記	引窓の段（小松＝団二郎、越路＝弥七）。	女房おはや（文雀）、南方十次兵衛（玉男）、 濡髪長五郎（玉昇）、十次兵衛母（文昇）。
1977	昭和52	9/10～24	東京 国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	堀江相撲場の段（口 松香＝勝司、長五郎一呂ノ咲・長吉一相生＝勝太郎）、大宝寺町米屋の段（中 緑＝団二郎、奥 咲ノ呂＝勝平）、難波裏殺しの段（長五郎一伊達路・郷左衛門一英・有右衛門一三輪・吾妻一津駒・与五郎一南司ノ文字栄・長吉一緑＝叶太郎）、橋本の段（切 津＝吉兵衛）、八幡里引窓の段（中 嶋＝団六、奥 文字＝錦糸）。 ※鶴沢叶太郎休演のため、「難波裏殺しの段」を野沢勝司が代演。	山崎与五郎（玉松）、藤屋吾妻（亀松）、女房お早（清十郎）、南方十次兵衛（玉男）、山崎与次兵衛（文昇）、濡髪長五郎（玉昇）、放駒長吉（小玉）、姉お関（簗助）、嫁お照（一暢）、駕籠昇甚兵衛（勘十郎）、橋本治部右衛門（作十郎）、長五郎母（文雀）。
1977	昭和52	9/25	東京 国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	堀江相撲場の段（緑・津国・南司＝研修生）。 ※文楽若手発表会（第3期文楽研修生第2回試演会）。	濡髪長五郎（玉女）、放駒長吉（簗太郎）、山崎与次兵衛（勘寿）。
1977	昭和52	10/15～30	朝 日 座	双蝶々曲輪日記 通し狂言	相撲場の段（長五郎一呂・長吉一相生＝勝太郎）、大宝寺町米屋の段（緑＝清友、咲＝勝平）、難波裏喧嘩の段（長五郎一松香・郷左衛門一英・有右衛門一三輪・吾妻一津駒・与五郎一津国・長吉一緑＝叶太郎）、橋本の段（津＝吉兵衛）、八幡里引窓の段（嶋＝重造、文字＝錦糸）。 ※吉田玉昇16～20日休演のため、放駒長吉「相撲場の段」を吉田玉松、「大宝寺町米屋の段」「難波裏喧嘩の段」を吉田玉幸が代演（『吉田文雀ノート』に拠る）。 ※11月23日「難波裏喧嘩の段」「八幡里引窓の段」をテレビ放送（「朝日新聞（大阪版）」「毎日新聞（大阪版）」「読売新聞（大阪版）」（11月23日）、NHKクロニクルに拠る）。	山崎与五郎（玉松）、傾城吾妻（亀松）、女房お早（文雀）、南方十次兵衛（玉男）、山崎与次兵衛（文昇）、濡髪長五郎（勘十郎）、放駒長吉（玉昇）、姉お関（簗助）、嫁お照（一暢）、駕かき甚兵衛（作十郎）、橋本治部右衛門（清十郎）、長五郎の母（玉五郎）。
1978	昭和53	9/9～19	地方公演 （九州・中国・東海）	双蝶々曲輪日記	引窓の段（相生＝勝平、津＝吉兵衛）。 ※文化庁主催移動芸術祭。	女房お早（清十郎）、南方十次兵衛（勘十郎）、濡髪長五郎（玉昇）、長五郎の母（文雀）。
1980	昭和55	11/1～3	京都 京都府立文化 芸術会館	双蝶々曲輪日記	引窓の段（呂＝勝司、十九＝錦糸）。 ※桐竹勤十郎3日休演のため、南方十次兵衛を吉田玉男が代演（『吉田文雀ノート』に拠る）。	女房お早（一暢）、南方十次兵衛（勘十郎）、濡髪長五郎（小玉）、長五郎の母（文雀）。
1981	昭和56	9/5～20	東京 国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（中 咲＝清介、切 津＝団七）。 ※国立劇場開場15周年記念。 ※桐竹勤十郎休演のため、濡髪長五郎を豊松清十郎が代演。	女房おはや（簗助）、南方十次兵衛（玉男）、濡髪長五郎（勘十郎）、十次兵衛母（文雀）。
1985	昭和60	8/17～9/1	東京 国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（中 十九＝勝平、切 越路＝清治）。 ※竹本越路太夫8月30日休演のため、「八幡里引窓の段・切」を豊竹嶋太夫が代演。桐竹勤十郎休演のため、南方十次兵衛を吉田文吾が代演。	女房お早（簗助）、南方十次兵衛（勘十郎）、濡髪長五郎（玉幸）、長五郎の母（文昇）。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1985	昭和60	9/13~29	国立文楽劇場	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（中 呂=叶太郎、切 越路=清治）。	女房お早（簀助）、南方十次兵衛（玉男）、濡髪長五郎（文吾/玉幸）、十次兵衛母（玉五郎）。
1989	平成1	9/9~24	東京国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	堀江相撲場の段（長五郎一緑・長吉一三輪=浅造/清二郎）、大宝寺町米屋の段（中 千歳=弥三郎/八介、奥 伊達=富助）、難波裏喧嘩の段（長五郎一松香・郷左衛門一文字久・有右衛門一南都・吾妻一貴・与五郎一呂勢・長吉一津国=燕二郎）、橋本の段（切 住=団六）、八幡里引窓の段（中 咲/呂=錦弥、奥 呂/咲=清治）。	山崎与五郎（一暢）、藤屋吾妻（紋寿）、女房おはや（簀助）、南方十次兵衛（玉男）、山崎与次兵衛（玉松）、濡髪長五郎（文吾）、放駒長吉（玉女）、姉お関（文昇）、嫁お照（和生）、駕籠昇甚兵衛（作十郎）、橋本治部右衛門（玉幸）、長五郎母（文雀）。
1989	平成1	11/3~20	国立文楽劇場	双蝶々曲輪日記	堀江相撲場の段（長五郎一緑・長吉一三輪=浅造/清二郎）、大宝寺町米屋の段（中 千歳=弥三郎、奥 伊達=富助）、難波裏喧嘩の段（長五郎一松香・郷左衛門一文字久・有右衛門一南都・吾妻一貴・与五郎一呂勢・長吉一津国=燕二郎）、橋本の段（切 住=団六）、八幡里引窓の段（中 呂=清介、奥 十九=燕三）。 ※大阪市制100周年記念。	山崎与五郎（一暢）、藤屋吾妻（紋寿）、女房おはや（簀助）、南方十次兵衛（玉男）、山崎与次兵衛（玉松）、濡髪長五郎（文吾）、放駒長吉（玉女）、姉お関（文昇）、嫁お照（和生）、駕籠昇甚兵衛（作十郎）、橋本治部右衛門（玉幸）、長五郎母（文雀）。
1994	平成6	9/10~25	東京国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（中 小松=清友、切 住=燕三）。	女房お早（簀助）、南方十次兵衛（玉男）、濡髪長五郎（玉幸）、十次兵衛母（文昇）。
1995	平成7	11/4~26	国立文楽劇場	双蝶々曲輪日記	堀江相撲場の段（長五郎一咲・長吉一緑=八介）、大宝寺町米屋の段（中 三輪=弥三郎、奥 伊達=団六）、難波裏喧嘩の段（長五郎一相生・郷左衛門一文字久・有右衛門一南都・吾妻一貴・与五郎一呂勢・長吉一津国=喜左衛門）、八幡里引窓の段（中 小松=清友、切 住=燕三）、橋本の段（切 織=清介）。 ※鶴沢燕三休演のため、「八幡里引窓の段・切」を野沢錦弥が代演。	山崎与五郎（玉女）、藤屋吾妻（紋寿）、女房おはや（簀助）、南方十次兵衛（玉男）、山崎与次兵衛（文昇）、濡髪長五郎（文吾）、放駒長吉（簀太郎）、姉お関（一暢）、嫁お照（和生）、駕籠かき甚兵衛（作十郎）、橋本治部右衛門（玉幸）、長五郎母（文雀）。
1997	平成9	10/25	東京国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（相生=団七）。 ※第9回文楽素浄瑠璃の会（第101回邦楽公演）。	
1999	平成11	12/4~16	東京国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	【Aプロ】八幡里引窓の段（中 三輪=燕二郎、奥 呂=錦糸）。	女房お早（和生）、南方十次兵衛（文吾）、濡髪長五郎（玉女）、十次兵衛母（紋寿）。
					【Bプロ】八幡里引窓の段（中 津国=弥三郎、奥 英=富助）。 ※第31回文楽鑑賞教室。	女房お早（勘寿）、南方十次兵衛（玉幸）、濡髪長五郎（玉也）、十次兵衛母（一暢）。
2000	平成12	9/26	東京国立演芸場	双蝶々曲輪日記	引窓の段（津国=喜一朗）。 ※文楽若手素浄瑠璃の会。	
△ 2000	平成12	9/25	東京紀尾井小ホール	（双蝶々曲輪日記）	堀江相撲場の段（咲甫=清介）。 ※豊竹咲甫大夫の会。素浄瑠璃。 ※『邦楽と舞踊』第51巻9号（平成12年9月）掲載の広告に拠る。 ※『文楽さんまい』中の記事は「引窓」の上演とする。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
2000	平成12	11/4~26	国立文楽劇場	双蝶々曲輪日記	堀江相撲場の段（長五郎一松香・長吉一千歳＝団七）、大宝寺町米屋の段（中 津国＝喜一朗／団吾、奥 伊達＝団六）、難波裏喧嘩の段（長五郎一貴・郷左衛門一南都・有右衛門一文字栄・吾妻一咲甫・与五郎一始・長吉一文字久＝宗助）、橋本の段（切 嶋＝清介）、八幡里引窓の段（中 英＝清友、切 綱＝清二郎）。 ※吉田作十郎休演のため、駕籠かき甚兵衛を吉田玉幸が代演。	山崎与五郎（簀太郎）、藤屋吾妻（和生）、女房おはや（簀助）、南方十次兵衛（一暢）、山崎与次兵衛（玉松）、濡髪長五郎（玉幸）、放駒長吉（玉女）、姉お関（文雀）、嫁お照（清之助）、駕籠かき甚兵衛（作十郎）、橋本治部右衛門（文吾）、長五郎母（紋寿）。
△	2001	平成13	1/30	T・Bホール	（双蝶々曲輪日記） 引窓の段（津国＝喜一朗）。 ※文楽若手素浄瑠璃の会。 ※『演劇界』第59巻第5号（平成13年4月）に拠る。	
	2002	平成14	6/1	国立文楽劇場	双蝶々曲輪日記 引窓の段（住＝錦糸）。 ※第5回文楽素浄瑠璃の会（文楽劇場第24回邦楽公演）。	
	2003	平成15	1/31・2/1	ドーンセンター	双蝶々曲輪日記 引窓の段（新＝喜一朗、呂勢＝宗助）。 ※第9回文楽若手自主公演「十色会」。	おはや（勤弥／紋臣）、南与兵衛（清五郎／玉佳）、濡髪長五郎（文哉／簀紫郎）、南与兵衛母（文司／亀次）。
△	2003	平成15	2/24	東京紀尾井小ホール	（双蝶々曲輪日記） 引窓の段（津駒＝宗助）。 ※紀尾井素浄瑠璃の会。 ※チラシに拠る。	
	2003	平成15	10/25	東京国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記 八幡里引窓の段（住＝錦糸）。 ※第15回文楽素浄瑠璃の会（第125回邦楽公演）。	
	2004	平成16	9/11~26	東京国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記 通し狂言 堀江相撲場の段（長五郎一松香・長吉一三輪＝弥三郎）、大宝寺町米屋の段（中 呂勢＝喜一朗、奥 千歳＝清治）、難波裏喧嘩の段（長五郎一津国・郷左衛門一文字栄・有右衛門一相子・吾妻一睦・与五郎一芳穂・長吉一咲甫＝喜左衛門）、八幡里引窓の段（中 文字久＝清友、切 住＝錦糸）、橋本の段（切 綱＝清二郎）。 ※桐竹紋豊休演のため、山崎与次兵衛を吉田和生が代演。竹本相子太夫休演のため、「難波裏喧嘩の段」有右衛門を竹本つばさ太夫が代演。野沢喜左衛門休演のため、「難波裏喧嘩の段」を野沢喜一朗が代演（『演劇界』第62巻第16号（平成16年12月）に拠る）。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。	山崎与五郎（文司）、吾妻（紋寿）、女房おはや（簀助）、南方十次兵衛（勤十郎）、山崎与次兵衛（紋豊）、濡髪長五郎（文吾）、放駒長吉（玉輝）、姉お関（和生）、嫁お照（清之助）、駕籠かき甚兵衛（玉也）、橋本治部右衛門（玉女）、長五郎母（文雀）。
	2007	平成19	5/30	東京紀尾井小ホール	双蝶々曲輪日記 引窓の段（切 住＝錦糸）。 ※「住大夫三夜」公演。	
	2008	平成20	11/1~24	国立文楽劇場	双蝶々曲輪日記 難波裏喧嘩の段（長五郎一南都・郷左衛門一津国・有右衛門一呂茂・吾妻一睦・与五郎一希・長吉一芳穂＝団吾）、八幡里引窓の段（中 文字久＝喜一朗、切 住＝錦糸）。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。	山崎与五郎（簀一郎）、藤屋吾妻（一輔）、女房おはや（玉英）、南方十次兵衛（勤十郎）、濡髪長五郎（玉也）、放駒長吉（幸助）、長五郎母（文雀）。
	2009	平成21	8/22~23	愛媛内子座	双蝶々曲輪日記 八幡里引窓の段（前 呂勢＝清治、切 咲＝燕三）。 ※第13回内子座文楽。	女房おはや（清十郎）、南方十次兵衛（勤十郎）、濡髪長五郎（玉女）、長五郎母（文雀）。

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△ 2011	平成23	9/22	東京 日経ホール	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（住＝錦糸）。 ※竹本住大夫素浄瑠璃の会。 ※チラシに拠る。	
2011	平成23	9/25～ 10/17	地方公演 （近畿・東北・関東・北陸・東海）	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（中 つばさ＝喜一朗、奥 呂勢＝清治）。	女房おはや（簀助）、南方十次兵衛（勘十郎）、濡髪長五郎（玉輝）、長五郎母（玉也）。
2012	平成24	2/25～ 3/17	地方公演 （沖縄・九州・中国・近畿・関東）	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（中 睦＝喜一朗、奥 文字久＝錦糸）。	女房おはや（清十郎）、南方十次兵衛（紋寿）、濡髪長五郎（玉輝）、長五郎母（勘寿）。
2013	平成25	12/21～22	福岡 博多座	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（中 千歳＝藤蔵、奥 英＝清介）。 ※公益財団法人文楽協会創立50周年記念・竹本義太夫300回忌。 ※桐竹紋寿休演のため、長五郎母を吉田勘弥が代演。	女房おはや（簀助）、南方十次兵衛（勘十郎）、濡髪長五郎（玉女）、長五郎母（紋寿）。
2014	平成26	9/6～22	東京 国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	堀江相撲場の段（長五郎一松香・長吉一睦＝団吾）、大宝寺町米屋の段（中 靖／希＝清文、奥 津駒＝寛治）、難波裏喧嘩の段（長五郎一津国・郷左衛門一始・有右衛門一文字栄・吾妻一南都・与五郎一咲寿・長吉一小住＝喜一朗）、橋本の段（切 嶋＝錦糸）、八幡里引窓の段（中 呂勢＝清友、切 咲＝燕三）。 ※鶴沢寛治休演のため「大宝寺町米屋の段・奥」を鶴沢寛太郎が代演。 ※「清文」の「文」は異体字。	山崎与五郎（文司）、藤屋吾妻（清十郎）、女房おはや（簀助）、南方十次兵衛（和生）、山崎与次兵衛（勘寿）、濡髪長五郎（玉也）、放駒長吉（幸助）、姉お関（勘弥）、嫁お照（一輔）、駕籠かき甚兵衛（勘十郎）、橋本治部右衛門（玉女）、長五郎母（紋寿）。
2014	平成26	11/1～24	国立文楽劇場	双蝶々曲輪日記	堀江相撲場の段（長五郎一松香・長吉一芳穂＝団吾）、大宝寺町米屋の段（口 希／靖＝清文、奥 津駒＝寛治）、難波裏喧嘩の段（長五郎一津国・郷左衛門一始・有右衛門一文字栄・吾妻一南都・与五郎一咲寿・長吉一小住＝喜一朗）、橋本の段（切 嶋＝錦糸）、八幡里引窓の段（中 文字久＝清友、切 咲＝燕三）。 ※国立文楽劇場開場30周年記念。 ※「芳穂」の「芳」、「清文」の「文」は異体字。	山崎与五郎（文司）、藤屋吾妻（清十郎）、女房おはや（簀助）、南方十次兵衛（和生）、山崎与次兵衛（勘寿）、濡髪長五郎（玉也）、放駒長吉（幸助）、姉お関（勘弥）、嫁お照（一輔）、駕籠昇甚兵衛（勘十郎）、橋本治部右衛門（玉女）、長五郎母（紋寿）。
2019	令和1	10/19	東京 国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	引窓の段（織＝清友）。 ※第30回文楽素浄瑠璃の会（第191回邦楽公演）。	
2021	令和3	9/4～21	東京 国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	難波裏喧嘩の段（希＝清胤）、八幡里引窓の段（中 靖＝錦糸、奥 呂＝清介）。 ※国立劇場開場55周年記念。	山崎与五郎（簀太郎）、藤屋吾妻（玉誉）、女房おはや（勘弥）、南方十次兵衛（勘十郎）、濡髪長五郎（玉志）、放駒長吉（玉翔）、長五郎母（勘寿）。
2022	令和4	10/22	東京 国立劇場小劇場	双蝶々曲輪日記	八幡里引窓の段（千歳＝富助）。 ※第33回文楽素浄瑠璃の会（第203回邦楽公演）。 ※初代国立劇場さよなら公演。	

西暦	年	月	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
2023	令和5	11/4~26	国立文楽劇場	双蝶々曲輪日記	堀江相撲場の段（長五郎一睦・長吉一希＝清麿）、難波裏喧嘩の段（長五郎一津国・郷左衛門一南都・有右衛門一文字栄・吾妻一咲寿・与五郎一亘・長吉一碩＝寛太郎）、八幡里引窓の段（中 小住＝勝平、切 呂＝清介）。	山崎与五郎（勘次郎）、藤屋吾妻（玉誉）、女房おはや（一輔）、南方十次兵衛（玉男）、濡髪長五郎（玉志）、放駒長吉（玉勢）、長五郎母（勘寿）。